
ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

天笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜恥痴龍帝 見参〜

【Nコード】

N0115Y

【作者名】

天笑

【あらすじ】

兵藤一誠に憑依？転生？をしてしまった俺。
ちよいとばかし神……という名の変態から特典も貰った。
しょうがない。
頑張って生きていきますか〜。

この作品はエロ5・ギャグ2・バトル2・シリアス？1の割合で提供します。

そして主人公最強、ハーレム、主人公無双、変態仮面は無敵、等々色々なカオスが含まれていますのでそれらが嫌な方は読まない方が
良いです。

神……だと？（前書き）

作者は勢いだけで書いてます。

ご都合主義やら適当な箇所がありますが、生暖かい目で見守って下されば嬉しいです。

それでは始まります。

クロスアウツ！

神……だと？

「気がついたか？若人よ？」

目の前の人物？はそう言ってきた。

だが！！

俺はまた目を閉じた。

（うん。悪い夢だ。

うん。俺は何も見なかった。

うん。目が覚めればきっと輝かしい朝陽が俺の視界を照らしてくれる。

うん。間違いない。

うん。

俺の

視界に

ブリーフ二丁で

女性の下着を

被った

変態仮面なんて見なかったんだ!!!)

「残念ながら現実だ。若人よ。さあ股間(私)を見ろ!!! (クイツ、クイツ)」

凄まじい悪寒を感じた俺は即座に意識を浮上させ、某エクソシストに出てくる奴もビックリな動きで後退した。

後退した時に「ウホッ!? イイ動き」なんて言葉は俺の耳には入ってこない!

「(クイツ、クイツ)」

「……………(ゴクリ。)」

俺は態勢を整えた後、奴と対峙する。

股間を突き出し腰を揺らす奴。

奴の顔面には女性の白の下着（リボン付き）がジャストフィットイング。

あえて言おう。

……

……

……すごく……変態です。

対峙して2時間経った。

変態仮面が現在の状況を教えてくれた。（腰を揺らしながら）

奴は神様らしい。

そして俺は死んだらしい。

まあ死んだ時の記憶がフラッシュバックしてきたから俺は死んだの
だろう。

だが！

それより！！

何よりも！！！！

変態仮面が神様だということを！！！！！！

認めたくなかった！！！！！！

俺は認めたくなかった！！！！！！

大事な事なので2回言った。

話が進まないの、それは置いておこう。

まあ死んだ俺が何故変態仮面と対峙しているかというところ

「転生……だと？」

「うむ。そうだ。（クイツ、クイ）」

「死んだら普通に転生するんじゃないか？違うのか？（ウプツ。気持ち悪い〜）」

「ああ、それはだな……カクカクシカジカ……だ。（ハアハア、あの蔑んだ視線と怯えたような視線が混ざった感じ……タ・マ・ラ・ナ・イ）」

変態仮面の言う事を纏めると

変態仮面が仕事中にミスをした。（ミスの内容は聞いたら嫌な予感がしたのでスルーしたぜ）

そのせいで俺死んだ。

お詫びに特殊な転生をプレゼントフォーユー

現在に至る

らしい。

まあテンプレ……なら女神とか出てきて欲しかった……がそこは諦めよう。

「どんな世界に転生出来るんだ？」

「ふむ。私の管理する世界で「ハイスクールD×D」という世界だね。(クイツ、クイツ)」

「……まあいいや。色々聞きたいけど、聞く気が失せる。」

ハイスクールD×Dね………一歩間違えたら死亡フラグ一直線だな。

「で？特殊な転生つてのは？」

「何か力をプレゼンツしよう。」

「力………ねえ。あんま思いつかんなあ。」

「そうかね？ふむ………なら、キミが生前夢中になってプレイしていたゲームの力を幾つか上げよう。勿論、選んでくれて結構。それから全ての才能で限界突破付き。生前の経験、知識付き。他は………」

変態仮面が次々と付けていく。

長々と付けていってる所を俺はストップさせた。余計な力を貰ったら死亡フラグ一直線だからな。そして纏めると

- ・俺が選んだあのゲームの力を4個ぐらい。
- ・全才能限界突破

「まさかの逆バンジィイイーーーー……………(キラん」

こうして俺は転生した。

……………

……………

ハイスクールD×Dの主人公、兵藤一誠に。

……………どうしてこうなったorz

神……だと？（後書き）

目指せ

頂点！

変態のな！

主人公設定……かな（前書き）

相も変わらず適切な設定でごめんなさい

主人公設定……かな

兵藤一誠（転生ver）

変態仮面により転生？させられ兵藤一誠となった。

転生する時に変態仮面と遭遇してしまったので女体が恋しくなり若干？変態化した。

おっぱい超大好き。

おっぱい以外も大好き。

やる時はやってくれる男の子（色々な意味で）。

能力

1) スパロボOGsのアルトアイゼン・ヴァイスリッター・アンジユルグ・ソウルゲインの機体に換装できる能力

2) 変態的な肉体能力と魔力

3) 生前の知識や経験（原作知識含む）

4) 全才能限界突破

5) ???化

6) 赤龍帝の籠手

1) の機体換装能力については神滅具並みの力。

赤龍帝の籠手との併用で強化可能。 物語が進むにつれ新たな能力を載せていきます。

全て神（変態仮面）により魔改造化。
ただ機体色は全て赤。

2の肉体・魔力は変態仮面基準で付けてしまったのでかなり強し。

補足？

主人公の元いた世界はハイスクールD×Dの世界より上位の世界に位置している為、その上位世界である神（変態仮面）から付与された機体能力・変態的肉体能力・魔力等は特別なので悪魔の駒に影響しないし、この世界の者達に関知もされない。ただ自分の相棒となるドライグには後々機体換装能力に関して説明しようと主人公は思っている。

主人公設定……かな（後書き）

機体に関しては作者の好み。

アンジュルグ ヴァイサーガとソウルゲインに関してはおかしいだろ！というのは勘弁してください。
っっていうか色々勘弁してくだされば嬉しいです。

さて次は

キング・クリムゾンしていくぞ！

てへ

さあ、ぬこを擬てようではないか（前書き）

久々のD×D投稿。

待っていた方がいるかはわかりませんが、お待たせしました。

後、この作品のタイトルは現在（仮）です。

表記するのを忘れてました。

すいません。

しばらくはこれでいきますけどね。

とりあえず……早速原作ブレイクしてみよう。

どしどし

さあ、ぬこを愛でようではないか

皆さんこんにちは。

兵藤一誠に転生してはや12年。

俺は現在小学6年生。

今日も未来に向けて頑張って体を鍛えています。
ただね

『相棒。今日は修行をしないのか?』

『あゝ……今日は体を休める日にしとく。そこそこ強くなっただろうし。』

今の会話は頭の中?かな。

そんな感じで話してるんだけど……。

まあともかく原作同様に《赤龍帝の籠手》も付いてきてましたよ。

5歳ぐらいから体を少しずつ鍛え始め、8歳ぐらいの時に赤いドラゴンが何か夢に出てきたから、もしかしてと思い起きた時に心の中で『おゝい』と呼び掛けたら………反応したんだよね、ドライグが。ドライグの方も何か驚いてたが。

驚いた後に我に返ったドライグは何か偉そうな口調で

「俺に気づくとは大した者だな。小僧。」

とか何とか言ってきたからイラツときた俺は思わず

「あ、悪い。今、エロ本見てるから後で。じゃっ。」

って言って、シャットアウトしちゃったんだ。

シャツトアウトする時に「ちょっ、待て」とか聞こえたけど勿論、無視。

その後も何かずっと話し掛けてきてたけど勿論俺は無視。最後の方になつてくると

「俺の話しを聞いてくれ〜（泣）。いや、聞いてください〜い（泣）。うおお〜ん（泣）。」

って泣いて懇願してきた。

あまりに哀れなドライグを見て俺は

「……………二天龍…ちょー笑えるんですけど（笑）。もうちょっと放置しよ」

勿論、無視しました。

その結果……………泣き疲れたのか叫び疲れたのか何も言わなくなりました。

流石に可哀想になった俺は就寝前に精神統一の要領でドライグの所に行つてみようとしたら……………行けたよ。

やってみてビックリだったね、あれは。

まあ神様からチートっぽい肉体とか貰ってるから出来たのかな。

とりもまあドライグの近くに降り立つと……………グーグー寝てた。

再びイラッとききました。

人間イラッときたらやることは勿論

「寝てるんじゃないやねえよ！！この泣き虫トカゲエ！」

ドゴッ

ぶっ叩くよね、普通。

いや……流石にちよい叩いた手が痛かったけどさ。

ただドライグの方も結構効いたみたいで慌てて起きた。

ドライグを起こした俺はその後、色々と話した……のはいいんだけど殆どはドライグの質問だったけどな。

「どうやって此処まで来た？」とか「さっきの衝撃はおまえか？」とか「精神世界とはいえ俺を殴ってちよつと痛いとか…人間かおまえ？」などなどだ。

まあそこらは割愛しよう。

とにかくドライグと意志疎通ができたから神器が発動できるかな？
と思ひ、試してみた。

……んだけど、何故か発動しなかったんだよね。

ドライグも驚きながら「こんな事は初めてだ。俺もわからん。」と言ってきた。

俺はまあどうでもいいかと思ひ、原作時期になったら発動できんだろと割り切った。

というか、発動できなくても生き残る術はあるしな。

そんなこんなでドライグとは魔法とかでよくある念話みたいな感じでよく会話をしている。

ただ……俺があまりにエロい事に若干呆れていたが。

仕方ないじゃん。

あんな変態を魂時に見たら女体が恋しくなるのは当然じゃん!?

だから俺は悪くない。

悪いとしたらあの変態仮面が悪い。

で、ドライグと意志疎通しながら身体をちよくちよく鍛えたりしてたんだよ。

今の俺、結構凄いなと思う。

12歳の段階で……軽く石を握ると砕けます。

地面殴ると……陥没します……アスファルトが。

罅が入るとかじゃなく陥没ね。

反復横飛びをちよい真面目にすると……残像拳もどきが出来た……

これにはちよつと感動した。

……とにかく……うん、あの変態仮面やり過ぎだ。

まあ……いっか。

幸いな事に筋肉ムキムキじゃないから。

とにかく今の俺はこんな感じ。

で、話を戻して

ドライグと会話しながら俺は今学校帰り。

担任の美奈子先生（美人しかもナイスボディ、ここ重要）のプリプリのお尻とバインバインのオツパイを脳内再生しながら歩いていたら

「ニャ〜オ」

「お、猫だ。しかも真つ黒。……可愛いなあ〜。」

猫発見。

あまりの可愛さに俺は夢中です。

何やらドライグが言ってきたるが猫の愛らしさの前にした俺には釈迦に説法。

猫に向かってしゃがみ込み

「チツチツ、おいで〜。」

猫呼ぶ。

すると人慣れしてるのか

「ニャア〜」

ネコキター！

ちなみに俺は猫大好きです。

俺の手に擦りよる黒い猫。

かゝいゝな

擦りよる猫の顎を搔いたり頭撫でたりしてた時に気づいた。

「あれ？こいつ怪我してら。…………結構痛そうだぞ、これ。」

後ろの右足辺りに傷があった。

猫好きな俺は

「よっしゃ。おまえ、ちょっと俺んち来い。手当てしやるから。」

と猫に話し掛けて抱き上げた。

暴れるかな〜と思ったけど、意外にすんなり抱かれた。

ほんとに人慣れしてんな、こいつ。

「ま、いいか。レッツゴー うは、ふかふかだ、こいつ。猫サイコ
オー。」

猫の抱き心地の良さに俺の気分は有頂天。

俺はそのままルンルン気分で帰宅した。

……………この後……………エライ事やってもうたと後悔する事も知らずに。

さあ、ぬこを愛でようではないか（後書き）

もし原作を知らない方がいるのなら

二天龍……ドラゴン族でもトップクラスの力の龍。

赤い龍……ドライグ。

白い龍……アルビオン。

この2匹の龍の力は神や魔王（この世界の）をも凌ぐといわれている。

はるか昔にこの2匹が大喧嘩して色々あって神器セイクリッド・ギアに魂を封じ込められた。

………だったかな。

セイクリッド・ギア

神器……神が造り出したもの。人間の身にしか宿らない規格外の力。

ロンギヌス

中には神滅具という強大な力を持つ神器もある。

ブーステッド・ギア

主人公が持っている赤龍帝の籠手もそれに当てはまる。

詳細はまた物語中に出てきます。

恐らく。

今の所はこんなところか。

というか、こんな説明いるのかどうかよくわかんない。

まあまた次回に。

主人公は頑張ります（前書き）

こんな感じで主人公は頑張ります。
どうぞ。

主人公は頑張ります

「……………」

「……………」

『相棒、どうした？』

ドライグが何か言ってきたが俺には返事をする余裕がない。
何故なら……………今、俺の目の前には理解したくない光景が広がっているから。

「どうした？ボーイ？そんな所に突っ立ってないで早く座りたまえ。
……………おおっと、もしかして我輩の膝の上に座りたいのかい？なかなか積極的なボーイじゃないかあ……………濡れるぜ。」

……………黙れ、てめえ。

そう思ったが口には出さない。
言った瞬間に何やら理不尽な目……………いや恐ろしい目に合いそうだから。

ちなみに俺の目の前にいるクリーチャーの容姿……………な感じのリーゼントっぽい感じの髪型をしてている。
しかも黒い猫耳が生えている。
紫のレオタードっぽい服をピッチリ着込んでいる。
あそこがモッコリと隆起しています。

……………オエッ

某グラップラーの主人公並みにムキムキさらにテカテカしてます。
……………大胸筋動かすな、キモイ。

黒い薔薇を加えています。

……薔薇、頑張れ。

うつすらとピンクの口紅を付けてます。

……化粧品メーカーに謝れ、てめえ。

……ごめん、これ以上説明したくない。

不甲斐ない主人公ですいません。

とにかく一言で説明するなら

へ・ん・た・い！！

なんだ。

俺が転生直前にあった変態仮面並みの変態だ。

そんな変態が少し部屋を空けたら出現してベッドに寝そべりながら扉を開けた俺を見ていたんだ。

何を言ってるか理解できないって？

安心してくれ俺も全く理解していない。

理解しても理解したくないから理解できない。

「ボーイ？どうした？そんな立ち往生しないでとにかく座りなよ。

……それとも何だい？俺に《ピー》でもさせたいのかい？ははは、
なかなかせつかちなボーイじゃないか。……だが嫌いじゃないぜ
え。」

ツツ！？

ヤバイ！

早く何か喋らないと……ヤられる！

「あんだ！？……もしかして……いや認めたくないんだけど……
……一縷の希望を持って聞くけど……さっきの猫……か？」

あれから何度も変態猫又に色々尋ね返した結果………違っていた。
原作キャラのエロい猫又お姉さん《黒歌》さんじゃなかった。
本当に………ほっとくに良かった。

もし事実なら………この世界を世紀末伝説のような世界にしてるとこ
だったぜ………できないだろうけど。

とにかく落ち着いた俺は変態猫又に優しく教えて上げる事にした。

「よし………とりあえずあんた…帰れ。それと2度とくんな。俺の前
に現れていいのは美女・美少女onlyだ。変態は間に合ってるか
ら。ついでに死んでくれ。」

『相棒………いつになく酷いな。』

いやいやドライグさん。

これでも優しく言ってる方ですから。

普通なら有無を言わさず鉄拳滅殺モノですんで。

………何で頬を赤らめクネクネしてんだ、この変態猫又。

「うふおう………少年からの熱い蔑みの言葉を受けた我輩………思わ
ず勃つちまったぜえ（ウツトリ。ビンビンしてきた………見なよボオ
ーイ。」

変態猫又があそこを突き出してきやがった。
俺は思わず

「……………オエエエエーッ」

吐いた。

マジ吐きした。

考えてもみる。
筋肉ムキムキの気色悪いオッサンがビンビンのアレをピッチリした
レオタード越しとはいえ見せつけてくるんだ。
俺の反応が普通だろう。
吐いた俺は悪くない。

ゲロ臭い部屋を掃除して換気してまた落ち着いた俺。
変態猫又も手伝ってくれたのにはちよつと驚いた。

で、変態猫又に何で人間形態で俺の前に出てきたのかを尋ねたら

「ボーイに仙術を教えてやろうかと思ってな。」

つてな事を言ってきた。

仙術……ねえ。

確かこの世界の仙術って“生命に流れる大元の力であるオーラ・チ
ヤクラというやつを重視して源流にしている点”………だったか。
魔法みたいな派手さはないけど生命の流れを操作する術で魔法を使
う奴らからすれば対処法が限られてくるから仙術食らった奴は大抵
死ぬ………だったな。

ふむ………学ぶのはいいんだけど確か俺の体って………

『なあドライブ。俺って………仙術使えんの？』

『わからん。相棒は………言っちゃ悪いが魔力が全く感じられん。生
命力も並ぐらいしか無い………と思うんだが………』

『どした？いきなり黙り込んで』

『……おまえの数々の行動を思い返せば普通の人間じゃないのは嫌でも理解しているから仙術も覚えられるんじゃないか……とな。』

……何だコイツ。

まるで俺が人外みたいな発言をさらりと言いやがって……泣かすぞ、この赤トカゲ#

俺の静かな怒りを敏感に感じ取ったのかドライグが必死に弁解してきた。

『待て待て待て！？考えてもみる！精神世界とはいえ二天龍である俺を魔力強化とかせずに素手で殴って「手……ちよつと痛い」で済む奴が普通な訳がないだろうが！？俺の方なんて結構痛いんだぞ。さらに言うならいつも不思議に思ってたんだがどうやって俺の元に来てるんだ！？まだ《セイクリッド・ギア》も発動してないの！？……気合いじゃね？』理不尽だ！？相棒のチェンジを要求する！『無理』うおお〜ん（泣）、何でこんな理不尽の塊みたいなのが今生の相棒なんだあ〜（泣）』

あらら……また泣き寝入りした。

原作と違ってこのドライグは泣き虫だな。

嘆かわしい。

まあいいか、後で殴るついでに慰めに行くか。

それより今は……

「オッサン……俺ってば仙術使えんのか？」

「我輩の見る目は確かだ。ボーイには何か不思議な感じがしてなあ

……ボーイなら極められると思っただけさ。」

……こいつ…俺の“力”に何となくだが気づいたのか。
ドライグですら気づかないのに……。
まあいいや、覚えれるなら覚えとくとするか。

「じゃあ教えて。俺、頑張る。ついでに格闘術とかもお願い。俺の名前は兵藤一誠。イツセーって皆は呼ぶ。」

「そうかい。わかったぜえ、イツセー。これからはらく熱うい修行を共に励もうぜ……。(ジュルリ)」

……早まったか俺(汗)。

とにかくいつちよ頑張って原作までにそれなりに強くなって死亡フラグを叩き折るとしよう。

……初めでも頑張って守るぞ!?

おまけ

「さてドライグ………楽しい楽しい八つ当たりタイム………もといサンドバッグタイムの始まりだ。」

「言い直した意味がない!?クツ、舐めるなよ相棒!俺とて二天龍と謳われ神や魔王すら凌ぐと言われていたんだ。いつも殴られっ放しだと思っな!?!」

「ほっほう……ならどうするんだ？」

「ごう……するんだあ（ガアアアツ）」

「赤龍帝のブレス……か。流石に強力だな……だが……」

ドガアアアアツ

「どうだ！？殺ったか？……なっ！？」

「……なかなか痛いじゃないかあ、ドライグさあん。思わず《換装》しちゃったじゃん。……つつか出来た事に俺もビツクリだけど。」

「……何だそれ？……赤い鎧……か？」

「これか？これはアレだ。おまえをお仕置きするために生まれてきた装備……名は《ソウルゲイン》だ。本来は青い鎧なんだけど。」

「何だそれは！？俺をお仕置きするためって！？ちよっとおかしいだろ、それー！」

「気にすんな 些細な事だ。さて……お仕置きされる覚悟は万端か？こいつのラッシュは……ちとイタイぞ……（ニヤリ）」

「ま、まで……ちよっと待「逝くぜえ！？《白虎咬》！」ギヤアア
――……」

UJU

主人公は頑張ります（後書き）

原作豆知識

黒歌について

原作では主人公・兵藤一誠のライバルである《白龍皇》側のエロい猫やお姉さん。
詳細はまた登場した時にでも。

ふう……主人公がまた強くなるなあ。

……原作どうしようかあ。
全く考えてない。

とりあえず……イッサーくんの貞操は無事ですからね。
後、ドライブ……頑張れ。

アーシア・アルジェント（前書き）

今回……珍しくシリアス？な雰囲気だ。

上手く書けたなんて保証はごさいません。

それで良ければどうぞ。

アーシア・アルジエント

はあ〜い 皆さん。

こんにちは〜。

俺は兵藤一誠。

この物語の主人公。

あれからもう何年も経ちましたよ。

今はもう高校二年生。

やりたい盛りの煩惱溢れる青少年さ

え？何？修行はどうしたって？

H A H H A、そんなもんを聞いて何が楽しいのかわからないけど、簡単に教えてようか。

はい回想シーンどうぞ〜

「ボーイ。仙術つてのを大まかに説明するとだな「あ、大体知ってる。やり方をとりあえず教えて。後、股間を強調すんな。近寄るな。……そうかい。なかなか博識じゃないかあ。なら早速実践といこうか。」

「よろし……何故近づく？何故背後に回った？」

「なあに。ちよいと荒療治だがボーイに気を流し込み感じてもらうだけだ。襲わないさ。我輩はこう見えて紳士だからな。無理矢理は嫌いなのださあ。……ジュルリ」

「ぐっ……教えてもらおう身とはいえ何か嫌だ……襲ってきたら躊躇いなくぶっ飛ばすからな。」

「りょくかい。やるぞ。フンッ！」

「……ツツツ！？この感じ……これが気……か。」

「やるじゃないかボーイ。一回でコツを掴むとはな。なかなか教えがいがある。」

「……ふむ。じゃあ次よろしく。」

「わかったぜえ。ボーイはタフだな。」

……数ヶ月後……

「おりやつ！？」

「まだ甘い！気の練りが遅い！？そんなんじゃあ我輩を満足させるには程遠いわぁ！」

「お前を満足さすなんて誰がやるかぁ！！」

……更に月日が経ち……

ドガッ

「グッ……見事だ、イツセー。今の一撃……我輩を超えたな……」

「はあはあ……やった……ようやく……この変態に満足する一撃……食らわせた。……しんどかったあ。」

「ふっ……もう我輩が教える事はない。これからは技を磨き上げ強くなれ……イツセー。」

「応さ。……色々あんがとよ……九呂鹿。」

「ようやく名前を呼んでくれたな……まだボーイ……いやイツセーとはいたい但我輩も色々とやることがあるのでな口惜しいがこれで終わりだ。」

「……行くのか？」

「ああ……また縁があれば会えるだろう。その時には……イツセーの初物を何が何でも奪ってやるさあ。さらばだ！？」（シユタッ）

「はっ……俺の初めての相手はもう決まってるんだよ。てめえなんかじゃやらねえ。……じゃあな。」

回想終わり

つてな感じである程度の仙術と格闘術を学んだのさ。
ちなみに強くなった俺を見てドライグが

『相棒が……強く……やめてくれ……俺に対する理不尽な八つ当たりが更に酷くなる……勘弁してくれえ（泣）。うおお〜ん（泣）』

だとさ。

H A H A H A、安心しろドライブ。

おまえに対する八つ当たりはちゃんと手加減するから。

何事も生かさず殺さずが基本なんだぜ

……あれ？俺ってこんなにSだったかな？

まあいいや、ドライブだし。

話を戻そう。

とにかく修行が終わり、日々を生きてきた俺。

最初に言った通り高校二年になってしばらくしたんだけど……来ないんだよね。

開始の幕を上げる彼女……天野夕麻改め墮天使レイナーレが。

原作では彼女が告白してきて俺がそれにOKしてちよつとの間恋人となった後に初デートして夕暮れ時の公園でロマンチックな雰囲気の中……殺される。んでからメインヒロインのリアスさんに助けられ悪魔として生まれ変わる……んだけど来ないんだよ。

あつれ〜？おかしいな〜。

ちゃんと駒王学園に入学して美女・美少女チエックしてメインヒロイン達がいるのを確認したから間違いないのに……何で？

しかもね〜、困った事にね……今、俺の目の前に金髪美少女シスターが右往左往してるんだよ。

ちなみに現在学校帰り。

彼女は原作のメインヒロインであるアーシア・アルジェントちゃんなんだよね。

まさか悪魔になる前に会うとはね……。

あ、転んだ。

……パンツをロックオン！……白……か。

グッジョブです！？

つと、それより助けないと

「大丈夫ですか？」

「あうう、すみません。ありがとうございます。」

手を差し出しながら声を掛けた俺。

彼女が英語でお礼を言いながら俺の手を取る。

うん？何？悪魔に転生してないのに何で英語が理解できるかって？

んなもん前世の知識を活用してんだよ！？

自慢じゃないが前世じゃ俺はバリバリ英語喋れたさ！

中国語・ドイツ語・フランス語も完璧さ！

何故なら……個人的にその国の女性が好きだったからだ！！

ドイツはラウルちゃん、フランスはシャルルちゃん、中国は超鈴音

ちゃん……1人作品が違うなんてのは気にすんな。

細かい事だ。

まあとにかく俺はその国の言葉なら喋れると理解してくれたらいいよ。

作者は無理ですので会話の中に《》を入れさせてもらいます。転生させてからは通常に戻します。

俺はシスターの手を引いて立ち上がらせた。

すると彼女のヴェールみたいなのが風で飛ばされた。

「……………」

俺は見入った。

束ねていたと思われる金色の長髪がこぼれ、ストレートのブロンドが夕日に照らされキラキラと光る。

そしてグリーン色の綺麗な瞳。

引き込まれそうになった。

完っ璧！美少女。

しかもぴよこんと跳ねたアホ毛も完備。

パーフェクトウ！？

まさにパーフェクトウ！？

内心で素晴らしく感動して呆然としてたら

「《あの〜…どうしたんですか？》」

訝しげな表情で俺の顔を覗き込んできたシスターちゃん。

………駄目だよ、キミ。

そんな簡単に見知らぬ男の顔へ近づいちゃあ………お持ち帰りしちゃうよ？

つと、そんな事より返事しないと

「《ゴメン、ゴメン。えっとキミは………旅行………じゃないか。》」

俺は彼女の横にあつた鞆を見てそう尋ねてみた。

………いや、違つのは知ってるんだけどね。

「《いえ、違つんです。実はこの町の教会に今日から赴任することとなりましたアーシア・アルジェントと申します。あなたもこの町の方ですか？》」

「《うん、当たり前。俺の名前は兵藤一誠。イツセーと呼んでくれ。

》

「《そうですか！よろしくお願ひしますね。》」

……グハツ!?

アーシアちゃんのニコポが発動。

俺のハートに6215のダメージを食らわせた。

くっ!?

何だこの可愛い生き物は!?

原作イツセーが超可愛いと言っていたのも頷けるってなもんだ!!

……原作ではこの子がレイナーレに殺されるんだよなあ……

助けても問題ない……かな?

そんな事を考えつつ俺はアーシアちゃんと会話をする。

彼女は道に迷ってしまい誰かに尋ねようにも言葉が通じなくて困っていたらしい。

俺は彼女を教会に案内……する事にした。

いや、してしまった。

……俺は最低だ。

彼女が教会に行けばどういふ処遇を受けるのか知っているのに……

……変に原作を弄るとどうなるか解らなくなる事を俺は怖れたんだ。

本当に……最低だ。

道案内をしようと歩き出した時

「うわあぁ〜ん!」

子供が転んで怪我をしていた。

アーシアちゃんがそれを見つけ慌てて近寄り

「《大丈夫?男の子ならこのくらいのケガで泣いてはダメですよ。

》

と言いながら擦りむいていた膝に手をかざし……

ポワッ

怪我を直した。

セイクリッド・ギアである《聖母の微笑》トウイライト・ヒーリングだ。

どんな傷でも直してしまおう神器。

例え悪魔だろうが墮天使だろうが人間だろうが。

俺が呆然としている間に母親が子供をそそくさと連れ去っていった

……アーシアちゃんに嫌な目を向けながら。

アーシアちゃんはその視線を受けながらも笑顔で手を振ってお別れをしていた。

子供の方も無邪気にお礼を言って去った。

……その笑顔はどこか寂しげだったのを俺は見逃さなかった。

俺は彼女に子供がお礼を言っていた事を教えた。

彼女はそれを聞き少し嬉しそうにした後

「《今の力……見ましたよね。あれは治癒の力……神様からいただいた素敵なものなんですよ。》」

俺にそうやってきた。

笑顔のまま。

俺は深く追及しないで

「《そうか。アーシアちゃんにはピッタリの力だな。アーシアちゃんは……優しいから……本当にお似合いの力……だな》」

「《優しいなんて！？そんな事はありませんよ！？》」

彼女は顔を赤らめながら謙遜した。

俺はそんな彼女を見て苦笑しながらそれを否定。

アーシアちゃんが優しくないなら世界中の奴らが優しくないと俺は

本気で思ったから。

俺とアーシアちゃんはお互いに否定しあう。

何か可笑しくなってきた俺達2人はプツと吹き出した後、大笑いをした。

ひとしきり落ち着いた後、アーシアちゃんを教会前まで案内。

現時点で悪魔じゃない俺は拒否反応は出なかったが……この教会から禍々しい気配だけは感じ取れた。

俺がそれを感じ取っている間にアーシアちゃんがここですと言いなから俺から離れた。

少し離れた後、彼女はくるりと振り向き

「《イツセーさん。今日はどうもありがとうございます。あのお礼がしたいんですけど》」

と言ってきた。

俺は思わず

「《いや！？いいよ、そんなの。ただ道案内をしたただけだし。俺はこれで帰るから。》」

そう返事をしてしまった。

アーシアちゃんは残念そうな表情をしつつ引き止めるのは悪いと思っただのだから

「《そうですか。それでは次に会えたら必ずお礼をしますね。なので……またお会いしましょうー！》」

笑顔でそう告げてきた。

眩しいな……。

彼女は本当に……優しくて良い子だ。

俺とは……全然違う。

俺は居たたまれなくなつてアーシアちゃんに別れを告げてその場を去つた。

……アーシアちゃんは俺が見えなくなるまで手を振っていた……。

自宅に戻つた俺はベッドで寝転びながらぼけつとしていた。
そんな俺が珍しいのかドライブが話しかけてきた。

『どうした相棒？ぼけつとして。お前らしくないな。いつもなら卑猥な本を呼んで興奮しているだろうに。』

……こいつは#

俺だつて悩む時は悩むんだぞ、バーローが。

『別に。偶にはこんな事もあるさ。今日がそんな気分なだけ。』

『……そうか。』

ドライブはそれつきり黙つたまま。

……まあいいや。

ドライブを相手にする気分じゃないし。

思い出すのはアーシアちゃんの笑つた顔。

次に寂しそうな横顔。

「……ほんと……最低だな俺。」

ポツリと呟いた俺の言葉は妙に部屋に響いた。
俺はそのまま…眠りについた。

つづく

アジア・アルゼント（後書き）

一旦区切ります。

次回はアジア編の最終回。

強引な展開になります。

先に謝罪しておきます。

すいません。

では

白騎士降臨！……あれ？（前書き）

文章が長すぎました。

最終回と言いながらも分けてしまった不甲斐ない作者です。

すいません（泣）

白騎士降臨！……あれ？

アーシアちゃんと別れた日の翌日

俺は朝からぼけーっとしながら授業を受けていた。

登校してきた俺にエロ同志たる元浜や松田がエロDVDがどうのとか言ってきたが、俺はそれを聞き流しながら2人に拳骨を食らわし黙らせてからDVDを回収してまたぼけーっとし始める。

考える事は昨日のアーシアちゃんの事。

未だにそれについて悩む俺。

……はあ、どうしたものか。

……

……

1日の授業がいつの間にか終わり帰り支度をしていたら

「こんにちは 兵藤一誠くん。」

と声が聞こえた。

俺は顔を上げる。

そこには……

「初めまして。私、天野夕麻です。ちょっと話したい事があるから……付き合ってくれないかしら？」

天野夕麻……いや墮天使レイナーレがにこやかに笑いながら立っていた。

「ここでいいかな……………」

レイナーレがそう呟いた。

俺はあの後レイナーレの言葉に了承し彼女の先導の元…………公園に連れて行かれた。

途中ドライブがレイナーレの事を墮天使だと忠告してきた。

俺は了解と言いドライブに見ているように告げておいた。

「で、俺に何か用？」

「あはは、せつかちだね。イツセーくんは。そんなんじゃない女の子にモテないぞ。」

余計なお世話です。

俺は今の俺を好きになってくれる子とイチヤイチャするんですー！
内心でそう毒づいていたらレイナーレが少し頬を赤らめはにかみながら

「まあ…………そんなあなたを好きになっちゃった私なんだけどね…………

…………イツセーくん。あなたが好きです。付き合ってください。」

告白してきた。

俺はそれに対して…………

「悪いが断る。俺はあんたとは付き合わない。」

バツサリ断った。

彼女は予想外だったのかポカンとしていた。

「えっと……あの……理由を……教えてもらってもいいかな？」

……演技だけは本当に上手いな。

腹の底では俺を嘲笑う気満々だったろうに。

こんな奴に……アシアちゃんが……俺は……

「俺はな……今の俺を好きになってくれる女の子と付き合いたいんだ。」

「イツセーくん？」

「もし……そんな女の子が現れなかったらそれはもう仕方がないって諦める。」

俺は……

「いや、だからね、私はあなたが好きだって「だから!?!」「ッ!?!」

……決めた。

「……せめて俺の知っている女の子達には……幸せになってもらいたいて……決めた。今、決めた。」

「何を……言ってるの?」

原作なんてもう知らない。

知った事じゃない。

優しいアシアちゃんが泣きながら死んでいく光景を見てしまっぐ

らいなら!?

「俺が……ハッピーエンドにしてやんよ!!!」

先の分からない恐怖なんてゴミ箱に捨てて廃棄物処理場にGoだ!!

「あなた……頭おかしいの?意味の分からない事を「うっさい。墮天使風情が。」……今なんて?」

ははは、表情と気配が一瞬で変わりやがった。本性が出てきたねえ。

「……あの墮天使も可哀想に。」

「何だ?いきなりどうしたドライグ?」

「いや何……あの墮天使が不憫で思わずな。」

「意味が分からん。」

「経験者は語る……だ。相棒があいつを敵と認めたんだろう?ならあの墮天使の行く末は決まっているではないか。」

「一応聞いておく。おまえ……どんな想像をした。」

「雌奴隷。違うのか?」

「……この泣き虫トカゲエ。」

後でぜってーにシバく。

それと間違いだ。

『ドライブグ1つ教えてやる。』

『?』

『俺は……腐った奴は大つ嫌いだ。側に置いておくのも虫酸が走る。だからこの場合……完全滅殺が正しいんだよ。』

『……そうか。程々にな。おまえが暴れると周辺被害が計り知れんぞ。殺るなら静かに殺れよ。後……トバツチリは勘弁しろ。』

……そいつは知らん。

つと、ドライブグと会話してたらあっちをほったらかしにしちまった。

「わりいな。墮天使さん。ちょいとばかりし気を取られちまった。まああんたみたいなゴミ虫以下にも劣る腐った奴にはお似合いの扱いだったか？」

「貴様っ！？たかだか人間風情が至高の存在となる私に向かって！？」

ははっ、キレた（笑）

あの怒った顔……チョー笑えるんですけど。

「何が至高だ。他人から奪うセイクリッド・ギアでいい気になんないよ。後、あのセイクリッド・ギアはてめえが触れていいもんじゃねえ。あの子だけのもんだ。あれはアーシアちゃんの為に存在するもんだ。」

「何故…それを……」

喋るかバーロー。

呆然としてやがる。

今の内に一撃………ッッ!?

「ヒヒヒッ、不味そうな臭いがするなあ。美味そうな臭いもするなあ。」

……こいつは………はぐれ悪魔か!?

何でここに?

こいつは確かどっかの廃屋に………

「ここは退散しておこうかしらね。(バツ)」

「待て!?!………チイツ、予想外の出来事で逃がしたか。」

レイナーレが黒い翼を生やして飛んでいった。

クソ、マズツた!

俺があいつの計画を知っているとしたら無理矢理にでも計画を始めるぞ!?!?

早くしないと………な。

とにかく今は………

「ああ、残念だ。美味そうな臭いの奴は行っちゃった。残ったのは不味そうな奴じゃないか。………まあいいか。今日はこいつで我慢しようかねえ、ヒヒヒッ。」

こいつを片付けるとしますかね。

『珍しいな。相棒が敵を取り逃がすなんて……………鬼の攪乱…と
言うんだよな、この場合。』

じゃかましいわ!?

レイナーレside

「兵藤一誠……………あの人間が何故あの計画を……………」

レイナーレが空を飛びながら呟いた。
そんな彼女の側に

「どうしたのだ?レイナーレ。そんな顔をして。」

「ドーナシック……………ちょっとしくじったわ。それより例の計画を早
めるわよ。」

レイナーレの言葉にドーナシックが怪訝な顔をする。

「……………計画が洩れている可能性があるわ。」

「なっ、バカな。そんな事は有り得んだろっ。」

「いえ…事実よ。さっき私が接触したセイクリッド・ギア持ちの人
間が知っていたわ。もしかしたらこの管轄をしている悪魔と関わ

りがあったのかも……だから邪魔者が入る前に始めるわよ。」

「……………その人間とやらは大丈夫なのか？」

「問題ないわ。見た所大したセイクリッド・ギアではないわね。《
トウワイス・クリティカル
龍の手》。ありふれたモノよ。」

レイナーレの言葉にドーナシークは納得。

彼も人間が《龍の手》を持った程度では障害にならないと思ったから。

故に彼女らが警戒するのは……

「ならば……《紅髪の滅殺姫リアス・グレモリーとその眷属の悪魔か。》」

「そうね。まあ悪魔風情にやられる私達ではないから大丈夫でしょうけど………万が一の為に警戒はしておきましょう。」

「了解した。カラワーナとミッテルトにもそう伝えておこう。計画を実行するのは何時だ？」

「今日……と言いたいけど準備もいるから明日の夜にしましょう。」

「わかった。」

ドーナシークはそう言いレイナーレから離れていった。

レイナーレもドーナシークが去ったのを見て移動を開始……そのまま自身の拠点へと飛び去っていった。

彼等は間違った。

一番警戒をしなくてはいけない相手を。

彼等の運命はこの時点で決定したのだ。

レイナーレside end

「はあ……リアス先輩は何をしてんだか……こんな雑魚をのさばらしておくなんてな。ドライグもそう思わない？」

「リアスとやらは知らんがこいつが雑魚というのには賛成だ。しかしまあ……」

「どした？」

「……一撃で木っ端微塵にした相棒には相変わらず驚かされるな。さっきのは何だ？以前見た鎧とは違っていたが……」

「あれか。あれは《アルト・アイゼン》って名前。特徴はさっき使った奴……と頑丈さだ。ちなみに補足すると先の一撃には気も込めた。中までぶち込んで生命の源……魂だな。それを爆散させた。その後でぶち込んだ武器を炸裂させて……身体をボカーンだ。理解できたかねワトソン君？」

『成る程。……俺には使うなよ。後ワトソン違う。』

ドライブは心配性だな〜（笑）。
相棒のお前にそんな危ない技を使うかよ、全く。
とにかく移動するか。
場所は……教会だ!?

『相棒……。』

『何だ?』

『移動するのはいいが……さっきの公園……滅茶苦茶にしたのはいいのか?』

『……俺があれを直せると思うか?』

『思わない。』

『だろ。だから気にしちゃいけない。大事の前の小事だ。』

『……そうか。』

リアsside

イツセーが立ち去った後、公園……だった場所では複数の人影が現

れていた。それは駒王学園の制服を着た男女達。
紅い髪を靡かせた巨乳な美女、リアス・グレモリー。
黒い艶やかな髪をポニーテールにした大和撫子を体現したような巨乳美女、姫島朱乃。
白髪で無表情そんな口リ顔美少女、塔城小猫（オツパイには触れるな。彼女には未来がまだある！？）
後はイケメンリア充、木場祐斗。

彼女達ははぐれ悪魔が現れたと聞いて急いでやってきたのだが……

「祐斗。はぐれ悪魔の他には何か情報はあった？」

「いえ何も。情報でははぐれ悪魔がここに向かったとしか聞いていません。」

「……そう。朱乃、魔力は感じ取れたかしら？」

「……はぐれ悪魔がいた痕跡と他には……微かですが墮天使の気配もします。」

「……墮天使……ね。ならその墮天使がやったと推測した方がいいのかしら？でも……」

リアスは周囲を見渡す。

それは……ある一点を中心に何かが発火したような後……否、惨状だったから。

ベンチは吹っ飛び、林はなぎ倒され、街灯はへしゃげていた。

爆発の中心と思われる場所は地面が深く凹んでいた。

まあ小型の爆弾が落ちたのをイメージしてくればいい。

近隣住民の迷惑にならないようにとイッセーはちゃんと公園に仙術

特有の結界を張ったので公園外には被害が出なかった。
ただそれがいけなかった。
何故なら……………

「部長。墮天使じゃないと思います。」

「小猫……………何故？」

「……………仙術の気配がありました。」

「……………それ本当に？まさか……………」

「いえ。違います。あの人ではありません。あの子の気配を間違える筈がありませんから……………」

「……………そう…ね。じゃあ一体誰が……………」

小猫との会話を終えリアスは考え込む。
仙術を使う墮天使……………は有り得ないと考える。
墮天使は基本的に魔法を中心として使う。しかも自分達の天敵である光を駆使して。

よしんば使うとしても今回の場合…はぐれ悪魔との戦闘があったならばほぼ必ず光関係の魔法を使う筈だから。
だがその痕跡は無いと朱乃が言ってきた。
朱乃がそう言ったのならそれは確実。
リアスは考え込む。

仙術を使う相手が自分の管轄にいる……………しかもはぐれ悪魔を一蹴する力量。

害があるかどうか調べなければいけない。
そう思った。

そんな時、周辺を調査していた朱乃が何かを見つけた。

「あら？これは……生徒手帳……この子は確か……部長、これを。」

朱乃がリアスに拾った物を渡す。

リアスはそれを受け取り……

「兵藤一誠……誰か知ってるかしら？」

そう呟いた後、尋ねた。

「知ってます。結構有名ですよ、彼。」

「私も知ってますわ。人づてですけど。」

「私は知りません。」

祐斗と朱乃が知っていると言い、小猫は知らないと言う。

リアスは知っている2人にどんな人物が聞いてみたら、2人は顔を見合わせてから

「えーと……卑猥な事が大好き……って言えばいいんですかね……」

「Hな事が大好きな子……ですね ふふふっ」

と言った。

リアスは生徒手帳に写った締まりの無いヘラヘラと笑ったイッセーを見ながら

「ふうん……とにかくこの子を調べようかしら。それでいいわね、皆。」

「……はい。」

リアスの言葉に3人が返事をする。

リアスは携帯で公園の修繕を依頼した後、立ち去った。
去り際に

「兵藤一誠……ね……面白そうな子。害は無さそうな感じね。」

手帳を再度見ながらそう呟いたのだ。

リアス s i d e e n d

「ぶえつくしっ!?!?」

いきなり鼻がムズムズしてきたから思わずクシャミが出ちまったよ。
ふう……きつと俺の事を噂している見知らぬ美少女がいた『相棒。
何か有り得ない事を考えてないか?顔が変だぞ?』………後でア
ルトのバンカー打ち込み決定。

まあいい。

それより今は……

『ドライグは何か感じるか?』

『ん？いや何も……というか今の俺では相棒の視界に写った相手の事しかわからん。俺のセイクリッド・ギアが発動してれば話は違ってたがな。』

そっぴりやすつかり忘れてた。

こいつのセイクリッド・ギア《赤龍帝の籠手》ってまだ発動できないんだっけ。

たぶん俺が悪魔にならなきゃ駄目なんだろうっけど……魔力関係で。今のこいつは文字通り役立たずなんだった。

『役立たずが（ペッ）』

『酷っ！？というか俺が悪いのか！？むしろセイクリッド・ギアを発動できない相棒が悪いだろうが！』

いやまあそうなんだけど……つい言葉に出しちゃったんだよ、勘弁な。

まあドライブは置いといて……今俺は教会前の木に潜んでいる。勿論、気配は遮断済み。

仙術チョー便利です。

で、気配を探ってみたんだけど……何か気配がしないんだよね。あれ？

場所合ってるよね？

ここだよな？

教会っていったらここしかないし……

「とりあえず待ってみるか。もしかしたら計画準備に手間取ってるかも知れないしな。……仮眠でもしとこ。」

おやすみ〜……zzz。

『お……………う！おい』

何だ？

うっさいな〜。

静かに寝かせるよ#。

『おい！？』

『うっさいわ！赤トカゲ！？静かに寝かせる、バカ！』

『赤…トカゲ……………酷い……………初めて言われた……………俺…ドラゴンなの
に……………トカゲ扱いつて……………うおお〜ん！？』

また泣いたし、こいつ（呆）。

つたく、何なんだよ。

泣きたいのはこつちだ。

せつかくの安眠を邪魔……………安眠？

……………あゝあゝ！？
ヤバッ！！

あんまり遅いから仮眠じゃなくなってたアー！？

『何でドライグは起こさなかったんだよ！！』

『だから俺は起こしただろうが!？それをお前……トカゲ扱いつて
(泣)……酷すぎるぞく、うおおくん(泣)』

………すみません。

今回は俺が悪かったです。
つとそれより今は………

『ドライブ。泣くのは後にしろ。謝罪も後でしてやるから。それよ
り今の時刻は分かるか?』

『ぐずつ………わかった。今はあれから丁度半日は経っている。』

『だから夜かよ。どんだけ寝てたんだ俺は………』

教会の中は………おっ、ビンゴオ〜。

地下の方にわんさか気配があるし。

上の階には………1人。

これは外道神父のフリードかね。

………どうだっついていいか。

瞬殺してやる。

『行け、ドライブ。俺の8割本気をちゃんと見ておけよ。』

『………何だ8割本気って。まあ面白いものが見れるとでも思ってお

く。(中)にいる奴ら………可哀想に(ホロリ)(泣)』

さてと………今回はこいつで行きますか。

お姫様を救うには騎士がお似合い!………ってね

「ヴァイス!!いつきまーす!?!」

リアス side

「それは本当なの？」

「はい。町外れの教会で墮天使が集まって何やら儀式めいた事をやっているそうですわ。」

「そう……下手に手を出すのはまずい……かしらね。」

朱乃の報告にリアスがそう答える。

下手に手を出せば墮天使と悪魔との全面戦争になりかねないからである。

これが墮天使全体の計画だったなら……の話だが。そんなリアスに朱乃がさらに告げる。

「部長。これは恐らく墮天使全体の計画では無いかと。一部の墮天使が暴走したものと思いますわ。」

「何故？」

リアスの問いに朱乃が自分の得た情報を教える。

「先日頂いた情報に何人かの墮天使がコソコソと動いているという

のがありました。それとその墮天使達は小物ばかり……というの。ここからは推測になります。が上の方達が何も言ってきておりません。もしこれが墮天使全体の計画なら少しぐらいいは情報を掴み指示を出してくるはず。それが全く無い。加えて天使側も何もアクションを起こしてない。」

「墮天使側の隠匿が完璧というのがあるけど？」

「嫌ですわ、部長。上の方達がそこまで無能……とは思ってらっしゃらないですよ。」

朱乃の言葉にリアスは苦笑する。

リアスも予想はしていたのだ。

念のために聞いただけ。

まあそこまで慎重にならざるを得ないのが現在の状態なのだが。

リアスは少し考えてから立ち上がり

「行くわよ。皆にも連絡を。」

そう告げた。

朱乃は了解と言いつと斗と小猫に連絡を取り始める。

そんな朱乃を見たりリアスはふと思った事を聞いた。

「そつえば兵藤一誠については報告がなかったけど？」

その問いに朱乃が困ったような表情をして

「それが……彼は今日欠席してまして……周辺人物から聞いた情報ですと……前に聞いた事と同じです……」

「家の方は？」

「家族関係は何世代か前を調べても普通でしたわ。後今日は家にいなかったみたいですね。小猫ちゃんが調べに行っただけです。」

それを聞いたリアスは最悪の展開を考えていた。

それは……イツセーがぐれ悪魔に食われたと言っことを。

逃げようとした拍子に手帳を落としたのか？と。

その後で謎の仙術使いがぐれ悪魔を滅した……そう考えたが附に落ちない点もある。

リアスはとりあえずイツセーについては後回しにする事にした。

今は墮天使の方が優先事項と思考を切り替えた。

そんなリアスに朱乃が連絡を終えていつでも行けると言ってきたので

「それじゃあ行くわよ。」

と告げ歩き出した。

朱乃もそれに続く。

リアス・グレモリーと兵藤一誠の邂逅は……間近に迫る。

リアス side end

other side

墮天使・レイナーレは高笑いを堪えるのに必死だった。
何故なら……

「もうすぐ……もうすぐよ。あれを手に入れたら私は至高の存在となる。」

「うう……」

レイナーレはうつとりとしながらアーシアを見やる……十字架に縛り付けられたアーシアを。

アーシアの胸元には何かの陣が描かれていた。
似たような陣がレイナーレの胸元に。

これはアーシアが持つセイクリッド・ギアを強引に抜き取り自身に宿す方法。

移植みたいなモノである。

これをやればアーシアが死んでしまいがレイナーレ達からすれば何も問題はない。

人間が1人死ぬだけ……いや、自分達の計画の足掛かりになるのだから感謝しろと言わんばかりの態度であった。

レイナーレの後ろに控えた3人の墮天使は

「これで我も上に……」

「レイナーレよ。約束は守るのだぞ。」

「もし約定を違えたら……解っているな？」

そう言った。

レイナーレは微笑みながら

「ええ。約束は守るわ。私がアザゼル様やシエムハザ様の寵愛を受けた後、あなた達が上に座せるようにお願いする…でしょ。わかっているわ。」

そう返事をした。

内心では切り捨てる気であるが表情には一切出さない。

実は3人も内心では幹部になったらレイナーレをどう始末してやるうか考えているのだが。

まあ似たり寄つたりの集まりである。

そんな時アーシアが意識を虚ろにしたまま呟く。

「イツセー…さん……………」

イツセーの名前を。

彼女はまた会うと言ったのに会う事ができなくなるという申し訳ない気持ちに心は渦巻いた。

異国の地で誰も助けられなかった自分に優しく手を差し出してくれたイツセーにお礼ができないなど申し訳ない気持ちもまた渦巻いた。

彼女は自分が死のうとしている間際でさえ他人の事を考えていたのだ。

アーシアは虚ろな意識のまま

「ごめん……………なさい……………イツセーさん……………お礼……………できそうに…
無いです。」

この場にはいないイツセーに謝罪した。

これが彼女の最後の言葉となる……………答だった。

アーシアの目の前にいる墮天使達とはぐれエクソシスト達が騒いでいる。

そんな時

ドガアアアーン！！

激しい爆発音と激しい揺れが全員を襲った。

そして……………

「ハツハアー！？お姫様は返してもらおうか！ゴミ虫以下の糞野郎共！！」

そんな声と共にアーシアを縛っていた拘束が解かれ誰かに抱かれた。アーシアは声に聞き覚えがあつた。

それは昨日自分を助けてくれた人の声。

また会ってお礼をすると約束した人の声。

アーシアはぼんやりと目を開け、その人の名前を呟いた。

「イツ…セーさん……………」

それに

「応さ。アーシアちゃん。また……………会えたな！」

意気揚々とした声が返ってきた。

アーシアは徐々に意識が戻り視界もクリアになってきた所で……………見た。

今のイツセーの姿を。

アーシアはそれを見てポカンとして

「赤い……鎧？……騎士？」

そう呟いた。

イツセーはそれを聞き取り

「お、よくわかったな。これは確かに騎士だぜ。名は《ヴァイスリッター》。意味は白騎士……なんだけど何で赤くなってんだ？……ドライグの影響か？……自己主張も大概にしるよな、あの泣き虫が。」

そう言い放った。

その後イツセーは仮面姿のままお姫様だっこしているアーシアに顔を向けて

「ま、そんな事より……助けに来たぜ……お姫様」

と宣言した。

それを聞いたアーシアは色んな気持ちがグチャグチャに混ざり言葉に出来なかった。

ただ……涙を流したのであった。

s i d e e n d

白騎士降臨！……あれ？（後書き）

原作豆知識（前回やってなかった）

堕天使

・言わずもがな天使が堕ちた種族。

堕天使達が集まり出来た組織が《神の子を見張る者》ケルキュである。
トップはアザゼルという強力な堕天使。

アーシア・アルジエント

・かつて聖女と称えられた金髪美少女ちゃん。
どんな傷でも癒やしてしまう《聖母の微笑》トワイライト・ヒーリングで色々な人を癒やしてきた。

が、ある時ひよんな事で傷ついた悪魔を癒やしてしまったのを教会関係者に見られた上に治した悪魔が被いに来たエクソシストを殺してしまった事でその罪を問われ《魔女》の烙印を押され教会を追放された。

紆余曲折を経て堕天使レイナーレの元に来た。

《紅髪べにがみのルイン・プリンセスの滅殺姫》

・原作メインヒロインであるリアス・グレモリーの二つ名。
滅亡の力を宿した彼女ならではの二つ名である。

天使・悪魔・堕天使の関係

・現在は三竦み状態でそれぞれ冷戦中。
はるか昔に大戦争を起こしそれぞれの陣営が大打撃を受けてひとまず戦争は終了した。
詳しい事は後の物語で明らかになる。

はぐれ悪魔

・眷属である悪魔が何かの理由で主から逃げたもしくは主を失った悪魔の事。
今回出てきたはぐれ悪魔は主のもとを逃げ己の欲望を満たすためだけ暴れていた雑魚キャラ。ちなみに名前はバイザー！。

はぐれエクソシスト

・何らかの理由で教会から逃げたもしくは脱退した元エクソシスト。
今回名前だけ出てきたフリードはそれなりに強くて結構有名な外道神父さん。

……次回出るかはまだわかりません！？

こんな所ですかね。

まあ分からないところがあるなら気軽に聞いて下さい。

……………頑張って調べます。

それでは次回こそ終わらせますので！

サヨナラ！

オツパイが……サンドイッチ…… (前書き)

結構描写を飛ばしてます。

分かりにくいと思います……… すいませんとしか。

これが限界なんだよ (泣)

オツパイが……サンドイッチ……

アーシアちゃんの救出完了っつと。

えつと……胸元にある陣がセイクリッド・ギアを抜き取る為のモノ
でいいんだよな？

……俺が拭き取る……のは駄目だよなあ。

「アーシアちゃん。その胸元にある陣って拭い取れる？」

「えっ？あ、はい、ちょっと待って下さい……んしょんしょ……

……取れましたあ！……イツセーさん？どうしたんですか？」

「……いや何デモナイヨ。気にしないで……」

見えた！？

見えちゃったよ！？

アーシアちゃん……拭い取る為に……胸元をガバツと広げたから見
えた！？

……素晴らしいものです。

ピンク色の先端はとても良かったです！？

……あ、鼻血が……

「貴様ツ！？何者だ！」

ん？

何かレイナーレが言ってきてる。

何者だ！と言われてもな。

「ツレないなあ、レイナーレさんは（笑）。昨日は俺に告白してき

てくれたのに。夕日をバックに頬を染めたレイナーレさん……
思い出すだけで……鳥肌が立つちゃったよ（笑）。ぶっちゃけキモ
かった。」

「……その声……あなた……まさか兵藤一誠なの!？」

おお、何か滅茶苦茶驚いてる。

そりゃそうだわな。

ただの人間と思ってた奴が天井ぶち抜いて現れたと思ったら赤い鎧
を着てるんだから……

「……死ねえ!」「」「」

おっ？

後ろの墮天使達が光の槍を。

……だが弱い。

バチイッ!

「……なっ!?!」「」「」

「ヴァイスの装甲ってかなり弱いのにそれを貫けない攻撃って……
マジよわっ。こんなんでもよくアザゼルとかに取り入ろうとしたな。
めっちゃ笑えるですけど。」

「……」「」「」

何か言葉にならないって感じで驚愕してるし……あれ? チャン
スじゃね?

カチャッ

照準よーし……ファイア

ドキュッ、ドキュッ、ドキュッ

ボガアッ、ズガアン、ドガアッ

「「「ギヤアーツ!?」「」」

はい3名様ごあ〜な〜い

「なっ!?!」

これで残るは1人。

………つてはぐれエクソシスト達は?

『相棒。悪魔祓いの奴らならお前が天井をぶち抜いた時の落盤で全滅しているぞ。』

え?マジで?

何そのモブ扱い?

声の1つも無いって扱い酷いな。

『お前が言うな。お前の方が酷いからな。』

………まいつか。

手間が省けたと考えるとこ。

つてアジアちゃん?

なして睨んできてますか?

「イツセイさん！？何で殺しちゃったんですか！？」

あゝ……………ミスった。

アーシアちゃんならこう言うのは予想できたのに……………
仕方ない……………か。

「アーシアちゃん。君には俺が酷い事をしてると映るだろうけどね
……………俺は止めない。あいつらをここで見逃したらきつと第2、第3
の被害者が出る。君はそんな事ないと言うかも知れないけど俺はそ
うは思わない。ああいう手合いはね、懲りない奴らだから。」

「そんな……………けど」ってな事は建前上の理由。本音は別にある。
……………え？」

そう……………一番の理由は……………

「本音は……………俺の大事な友人を……………可愛いアーシアちゃんを……………
……………自分達の欲の為に殺そうとした。それを見逃す事は絶対にできな
い！それをしたら俺が俺でなくなる。だから……………あいつらに断罪
を下す！……………軽蔑するならしてもいいよ。所詮やることは殺し
……………だから。」

「……………。」

はは、黙っちゃったよ。

本当にこの子は……………良い子だな。
だからこそ……………これからは幸せな人生を送らせてやりたい。
とりあえず降ろすか。

……………

さて……

「残るはアンタ1人だな。」

俺はレイナーレに向き直る。

動けないだろうな。

さつきから照準を合わせたままだから。

「……ふふっ…フフフッ」

???

何だ？

いきなり笑い出したぞ？

狂ったかな？

「あははは、あなたは確かに強いわね。あなたをただの人間と侮つたのが間違이었다わ。………けど…出来るのかしら？」

「……何が？」

「知っているわよ。あなた……学園でよく言ってるみたいね。女が好きだとか女は人類の宝だとか……そんな女好きなあなたが“女”である私を殺せるのかしらあ？」

………成る程ね。

「それにあなたって美女・美少女が大好きだってよく叫んでるじゃない。私は自慢ではないけどそれなりに整った顔立ちをしてるわ。身体もそれなりにね。そんな私を殺す？それともし今私を見逃してくれたら……お礼に私の身体……好きに貪ってくれていいわよ。流

石にずっとは無理だけどね。」

.....。

「あらっ？黙っちゃったわね。それは肯定していると思っ
ていいのか
しっっ。」

「..... イッセーさん。」

.....。

『あの墮天使..... 終わったな。』

..... 流石、ドライグ。

よくわかってる。

「なあ..... 1つ..... いいか？」

「何かしら？」

本当にこいつは.....

「確かに俺は女好きでエロくて欲望の塊だと思っ。」

「ふふ、それじゃあ」

いちいち俺の.....

「でもな.....」

「ん？」

逆鱗に触れやがるなあ！！

「幾ら女好きな俺でも腐った雌豚を抱く趣味はねえんだよ！！」

「ツツ！？き、貴様ア！言つに事欠いて私を雌豚扱いかア！殺す、絶対に殺す！！」

「出来もしねえことを言つてんじゃねえよ！？このまま楽に死なせてやるうと思つたが気が変わった。灼熱の中で悶え苦しみながら逝けや。アンジュルグ換装！！」

パアアアツ！！

「クツ！？（ここはやはり逃げた方が得策ね。一撃を放つた後、天井の穴から外に）やらせると思つて！？喰らいなさい！（バサッ）」

バシユツ

「ヴァイスの装甲を抜けない攻撃がアンジュルグに効くかよ、馬鹿が。」

バチィツ

最後の悪あがきつてか。

……一撃離脱しやがった。

ははは、お誂え向きに空に逃げやがった（笑）。

その判断……間違いだぜレイナーレさんよお。

『相棒。追いかけないのか？逃げられるぞ？』

『まあ見てな。……空に逃げた事を後悔させてやる。』

『俺は派手なのを希望するぞ。』

はは、ドライブも好きだね。

まあ了解。

んじゃまあ……殺りますか

バサア！？

両翼展開！

シューウンッ

弓展開！

チャキッ

照準……オールグリーン！

いくぜ！？

「コード《ファントム・フェニックス》……！！！」

キュアアアアッ！

『ほお……火の鳥か。』

ちゃんと物事は正しく教えなきゃな

「天使には美女・美少女しかいないんだ!?!?!」

「……………そうだったんですかあ!?!」

そうなのです。

ちゃんと正しい事を

『相棒。ちゃんと男の天使もいるからな』

……………俺の中ではそいつらはいない事になってるのさあ、H
A H A H A。

気を取り直した俺は換装を解きアーシアちゃんの手を引き地下祭壇
を出た。

んだけど……………

「あなた……………兵藤一誠?」

「あらあら、珍しい所で会いましたわね」

「部長…下がってください。」

「……………。」

リアス先輩一行とエンカウトしました〜……………やばい(汗)
いくら廃虚となつてた教会とはいえリアス先輩の管轄地域で派手に
ドンパチやらかしたんだ……………何を請求されるかわかんない……………っ
てアーシアちゃん？いきなり前に出てどうしたの？

「イツセーさんは悪くありません！？悪いのは……………私です！」

……………はあ……………全く……………この子は本当に自分を大事にしないな
あ。

リアス先輩達もキョトンとしてるし
ちゃんと説明しますかね

「あの先輩。状況説明しても良いですかね？」

「えっ？……………ええ、お願いしていいかしら。」

「はいそれじ……………すみません。その前に野暮用ができました。」

「？何かしら？」

「……………？」

そんな怪訝な顔しなくてもすぐに済みますって

「……………出てこいよ。気配の隠匿がまるで出来てないぞ。」

俺は二階の大きな窓の方に向く。

リアス先輩達もそちらを向く。

そこには

「バレちった 気配は殺してたのにねえ……。……イツセーくんだけ？やるね」

イカレ外道神父フリードがいた。

「プツ、あれで気配殺してたの（笑）。おまえスゲーな。その程度で自信満々にしてるのが（笑）。チョー笑えるんですけど。それとひき逃げアタック一撃で気絶した弱っちい神父ちゃんが何のようであらうか（笑）。」

ブハハハツ！

フリードの奴、こめかみひくつかせて必死に堪えてやがる（笑）。

ドライグ見るよ！？

負け犬ちゃんが吠えるの耐えてるよ。

めっちゃ笑えねえ？

『……………俺はあいつに同情するぞ。本当に可哀想に……………相棒と関わってしまったばかりに……………』

いや同情する価値もないだろ。

「……………クククツ、ヒヤツハツハツ！決めた！オレってば絶対に決めちゃった イツセーくん……………俺、おまえにフォーリンラブ 絶対にぶち殺しちゃ「アーシアちゃん。そんな薄着一枚じゃ寒いでしょう？上着貸したげるね」。「え？あ……………ありがとうございます」……………てめえ……………ことごとく舐めやがってえ……………（ピクピク）」

おんやあ？何か負け犬ちゃんが震えていますよ？

「……小便でも我慢してるのか？なら早くお手洗いにいきな。ついでに小便と一緒に前自身も流されてこいよ……汚物野郎。」

「ツツツ！！？ぶっころ……なっ！？身体が……てめえ！なにしやがった！？」

気づくの遅いわ、馬鹿が。

「金縛りですが。少しばかり仙術の応用でチヨチヨイとな……後……」

「「「「「なっ！？」」「」「」」

「はわあ！？イッセーさんが消えちゃいましたあ！あ、上着まで……」

皆さん驚いてます。

ちなみに俺は今……

「フリードくん 後ろ隙だらけですけど？」

「ツツ！？」

フリードの後ろにいます。

リアス先輩達も目を見開いて驚いてますな。

……驚いてるリアス先輩と朱乃先輩と小猫ちゃん……可愛いんですけど！？

「いつの間に！？」

「ん？それは秘密……なんてな。幻術を囿に気配遮断して近づいただけです。仙術ってマジ便利。後……おまえと会話するのがこれ以上面倒だから……お帰りしてちょーだい……なっ！？（ドガアッ）」

「グハア！？（ヒューン……）」

ははは、吹っ飛んでいったし。

『お前にしては優しい扱いだっただな？』

『そうでもない。今の一撃で体内の気の流れをかなり乱した。それなりの間は身体を動かそうとする度に激痛が走りまくる。あいつにやあ楽な死に方はさせないよん』

『聞いた俺が馬鹿だった。お前はそういう奴だったな。』

そんな褒めんな、照れる。

さてと汚物は片づけたし先輩達に状況説明しますかね。

「……………つてな感じですか？」

「そう……大体解ったわ。もう1ついいかしら？」

「何ですか？」

「はぐれ悪魔を退治したのもあなた？」

はぐれ悪魔……？

『お前が公園で木つ端微塵にした雑魚だ。』

ああ、そーいやりたなそんな奴。

「はい、そうですよ。レイナーレをそこで始末しようとしたら邪魔してきたので。」

「そー……朱乃。」

「了解ですわ（ガシッ）」

「……………へっ？」

何で朱乃さんは俺の腕を掴んだの？

……………いや、やーらかいオツパイがプニヨンと当たって嬉し
いんだけどね!?

おや、リアス先輩？

何でそんなにニコヤカな笑顔をしてるんでせう？

「兵藤一誠くん。壊した公園の修繕費……………払って頂戴。」

……………え。

「この教会を壊した件は墮天使の暴走を止めた件でチャラにしてあげましょう。でも公園の修繕費ははぐれ悪魔を討伐しただけじゃあ

……ちょっと足りないわね。だから……差し引いて残った分を払って頂戴。」

「……………いくらですか？」

「そうね〜……………ザッとこれぐらいかしら？」

……………oh〜、何か桁の数字がミエマスヨ。

リアス先輩を見ると……………めっちゃいい笑顔で手を出してるし。

横にいる朱乃先輩を見ると……………こちらもすごくいい笑顔ですね。

小猫ちゃん……………無表情で我関せずですか……………あ、欠伸をかみ殺してる、か〜わい〜。

アーシアちゃん……………オロオロしてる。

リア充……………苦笑してやがる……………シネ。

クツ……………進退極まれり……………なんてな〜。

リアス先輩……………まだまだ甘いわ！

「いいですよ。払います。一応、蓄えはありますから払えますんで明日払いにいきますね。」

「……………え？」

「あら？」

予想外の返事に先輩2人が驚いたし。

はっはっはっ！

何気に俺は100万ぐらいは貯金しているのですよ。

幼き頃からエロ本やエロDVDを鑑賞して品評したハガキを投函し続けていたら向こうの会社がコンタクトを取ってきた時……………マジ驚いた。

詐欺かと思った。

……ふっ、まあ昔の話だな。

詳しい事は聞くな。

それより今は

「現金一括払いでいいですか？」

こっちを片付けないとね。

「え……いやちよつと待って頂戴。」

ん？何か朱乃さんとアイコンタクトしてる。

何かの相談か？

あ、何か終わったっぽい……

ぷによ

ツツツ！？

朱乃様！？

なしてオツパイを押し付けてくるのでしょうか！？

「ねえ。兵藤くん。」

はわあ！？

耳に息を吹きかけないで！

「な、な、何でせう！？先輩！ひよわっ！？顔、ちかっ、近いですよ！」

「いやん。可愛い反応……兵藤くん……ううん、イッセーくんに

お願いがあるんだけどお。聞いてくれないかしら？」

「…へっ？お願い…ですか？…あのオツパイ…当たってます。」

俺の腕が朱乃先輩のオツパイに挟まれたアーーーー！！

「当ててるの それでね… 私達の仲間になって欲しいんだけど。」

当ててる…だと…！？

クツ、これは俗に言う色仕掛けというやつか！？

だがこの俺はそんな程度では屈しはしな

「仲間になってくれたら…揉んでもいいわよ？いえ…イツセーくんの好きにしてくれて…いいわ。」

「マジですか！？じゃあ仲間に「イツセーさん…」…アーシアちゃん？」

「イツセーさん…Hな事はいけません！」

う…いや…でもね…朱乃先輩のオツパイがね…やめて！
？そんな瞳で俺を見ないでエ！

「アーシア…だったかしら？」

「ふえ？…はい、何ですか？」

リアス先輩？

「あなたも良ければ私達の仲間にならないかしら？仲間になったら

……兵藤くんと一緒に過ごす事ができるわよ（ニコッ）「

……いやいやいや、その勧誘の仕方はない「なります！？イッセー
さんと一緒にいれるなら仲間になります！」「……………何言つて
るの？この子は？

「ふふっ、そう。歓迎するわ。じゃあ後は……………」

……………何で近寄るんですか？

あれ？朱乃先輩？

何で背後に？

ぷによ、ピタッ

これは！？

前方にリアス先輩、後方に朱乃先輩が！？

で、伝説の……………オッパイサンドイッチかあ！！？？

……………アアア……………2人のやーらかいオッパイが……………女の子特有のいい香りがアアア……………

「ねえ……………仲間になって……………イッセー。」

リアス先輩の甘い声がああ……………ははは……………もう……………いいよね？

俺……………頑張った……………よね？

……………もう……………無理イ！？

「は〜い……………仲間になります」

「ふふ、ありがとうイッセー。」

「これからよろしく願いしますわ、イツセーくん」

こうして俺は原作とは違った形だがリアス先輩の眷属悪魔に転生することとなりましたとさ。

………そういえばアーシアちゃん………悪魔になるってちゃんと理解してるのかね？

………してないんだらうなあ。

おまけ

(ふう………何とか仲間に引き込めたわね)

リアスは内心でそう思った。

リアスはイツセーの力を危険視したのだ。

彼女……いや彼女達は空で燃やし尽くされたレイナーレを目撃した。

イツセーが放った《ファントム・フェニックス》を見たのだ。

あれを見たリアス達は困惑した。

威力にはない………魔力を感じ取れなかった事に………だ。

未知の力。

それだけでも警戒に値するのに説明や質問、フリードとのやり取りで仙術まで使うのだ。

危険視するには充分。

だがリアスは同時にこうも思った。

彼が欲しい…

と。

イツセーを眷属に出来たらかなりの戦力強化となる。

そんな思いが生まれた。

だからあんなやり取りをしたのだ。

まあイツセーが本当に危険人物なら排除も考えたのだが……………

(彼……初めて見た時から私達を警戒してなかったわね？何故？…

…警戒するに値しなかった？)

そう。

イツセーがリアス達と出会っても一切警戒をしなかった。

まるでリアス達が自分とアジアにそう簡単に危害を加えないのを知っているかのように。

だからこそリアスも多少強力にでも勧誘した。

結果は先の通り、リアスの勝ち。

だがリアスはまだ知らない。

このイツセーを仲間に引き込んだのが……………どれほど幸運だったのかを。

(しかし……………からかい甲斐のありそうな子ね ふふふっ)

リアスはまだ知らない。

……………このイツセーが……………どれだけ自分に影響をもたらすかを。

UJU

オツパイが……サンドイッチ……（後書き）

原作豆知識

眷属悪魔

・悪魔には階級があります。
下級・中級・上級・最上級と。

詳しいことは恐らく話しに出てきますがとにかく上級悪魔から眷属を持つ事ができます。

眷属悪魔にするには《イヴァル・ピース悪魔の駒》を埋め込む事。
種族は問わない。

駒はチェスの駒と同じです。

女王1・戦車2・僧侶2・騎士2・兵士8です。

眷属にする相手の能力が高ければ駒消費が激しいです。

要するに兵士2個分の力を持っている相手を眷属にするには兵士の駒を2個使う……といった感じですよ。

ただキング…主の能力が高まれば駒を使う消費も抑える事ができる。
例）現在のリアスがイツセーを眷属にするには兵士8個分必要です。
だけでもしこの時に眷属にせずリアスが修行をして能力を上げて後から眷属にしようとするれば駒消費が7個になる可能性がある。

といった感じです。

これについては今のリアスは知りません。

制作者の隠し要素なんです。

これもまたいつか話しに出ます。

もう1つ。

これは今のリアスも知っている事ですが駒には《ミニョーテーション・ピース変異の駒》がある。

これは駒を複数使い眷属にしなければいけない相手を1つで済ます事ができるというイレギュラー。

制作者も予想外だったが面白いと理由で放置したみたいです。
上級悪魔で駒を所持している者達は一個ぐらいはあるそうです。
これもまたいつか出ます。

補足

眷属悪魔になるという事は転生するという意味合いだそうです。
この世界ではそうなっている。
悪魔になれば身体能力の向上とかメリットがありますが聖属性に對
しての抵抗が著しく低下する。
聖書の一部を読み上げられたら苦しくなったり聖水を浴びたらダメ
ージを食らったりなどです。

こんな所ですかね。

……………豆知識…いりますか？

本編では恐らく描写とか説明とかを飛ばしたりするから書いてるん
ですが……………。

後説明に間違いがあれば教えて下さい。
直します。

では。

驚愕の事実…発覚（前書き）

色々のご都合主義的な所がある……

細かい事は気にしないで。

皆さんがそんな心の広い持ち主だと信じてます。
では、どうぞ

驚愕の事実…発覚

「……………という事よ。2人共、解ったかしら？」

「俺はOKです。アジアは？」

「私も大丈夫です。」

「そう…なら次は……………」

現在俺はアジアと共にリアス先輩の悪魔講義を受けてます。日にちはあれから少し経った。

悪魔に転生した後は流れるに言えば原作と似た感じ。

アジアの学園編入と俺の家にホームステイする事がだ。で、アジアの周辺処理が終わって落ち着いた今日、リアス先輩達が所属しているオカルト研究会の部室に呼ばれ悪魔講義を色々受けているという訳だ。

あ、説明終わった。

「とりあえずこんな所ね。質問とかは……………ないのね。じゃあ私達から質問があるんだけど……………」

おや？

何か皆の視線が俺に集まってる……………いやん、リアス先輩達に見つめられたら興奮しちゃう……………すみません調子に乗りました。

「アジアの方は大体話しを聞いたからいいとして……………イッサー、問題はあなたよ。」

「俺っすか……何かしましたっけ？」

「……………はあ。」

溜め息つかれた。

……………しょぼん。

ん？小猫ちゃんが手を上げた？

「どしたの？」

俺は小猫ちゃんに聞く。

「先輩は仙術を使ってましたよね？誰に教わったのですか？」

……………ああ、それね。

別に黙っておけと言われちゃいないし……いいかな。

「変態猫又の九呂鹿だけど」

「ツツ！？……………変態猫又？」

小猫ちゃん表情が険しくなった……………と思ったら首を傾げた。
まあ当然の反応だわな。

「そつ。小猫ちゃんが何で険しい表情したのかは聞かないけど……
俺の言う九呂鹿っていう変態猫又の容姿は……（説明中）……………だよ。
つて、何を驚いてるのさ？」

何か小猫ちゃんがすごく驚いてるんですが

「え〜と、そんな所です。俺実はセイクリッド・ギア持ってます。部長が兵士の駒を8個消費したのもそのせいです。全部ドライブのせいです。」

「ドライブ…ですか？それがセイクリッド・ギアの名前ですか？」

「いや違います。セイクリッド・ギアの中にあるドラゴンの名前ですよ。」

「ドラ…ゴン…？」

「あい。」

流石の朱乃先輩もドラゴンとは予想してなかったのか呆然と呟いたなあ。

『おい相棒。どういつつもりだ？』

『ん〜、まあ面倒くさいからお前に丸投げした。口裏合わせろ。いない？』

『……………わかった。』

よしドライブの根回し終了。

「イツセー、そのセイクリッド・ギアの名前を聞いてもいいかしら？後、一度発動してみて頂戴。」

「いいですよ。発動は一部だけでいいですか？」

「いいわ。」

よし、これでOK。

ドライブグ……喜べ。

おまえを顕現させてやるからな。

「んじゃ先に発動しますね。……おら、さっさと出てこい。泣き虫トカゲ。」

『だからトカゲじゃない！？俺はドラゴンだあ！』

カアアアッ

おお、左手に籠手が出てきた。

……やっぱり悪魔転生が条件だったか。

「これは！？」

「あらまあ……」

「籠手……後は龍の紋章……」

「……赤い。」

「ふああ……」

皆さんの反応はまちまちですな。

リアス先輩だけは気づいたようだな。

……何か皆さんポカーンとしてらっしゃいますね。
あ、リアス先輩が何か言うぞ……

「え〜と……とにかくよろしく。……で、本当に赤龍帝なの？二天龍と言われた……あの？」

「そうだが。何か問題でもあるのか？」

……何でこいつは偉そうに言ってるんだ？

リアス先輩はおまえよりヒエラルキー的に上だぞ、ゴラア。

「さっきのやり取りを見ていたら……ちょっと……ね。気分を害してしまっただならごめんなさい。」

いやいやリアス先輩が謝る必要ありませんって。

全部こいつの「そうだ！？リアス・グレモリー。お前、相棒の主になっただる！ならこいつの横暴を止めさせてくれ！」………おいら、何を言い出してやがる#

「？どういう事？」

「こいつときたら何かと言えばすぐに俺を殴るわ、蹴るわで酷いんだ！この前なんて何も言っ「何言ってるんだ、ゴラア！リアス先輩に告げ口とはいい度胸してるじゃねえか、この赤トカゲエー！」なっ、相棒！？お前いつの間ここに！？クツ、いつもやられっぱなしだと……それは反則だろ！ギャア………」

「えっと……どうなってるのかしら？」

「今………宝玉からイツセーくんの声がしました…わよね？」

「僕も聞きました……」

「イツセー先輩……目……瞑ってます。あ、開いた。……籠手……消えました……。」

「つたく、あのバカドラゴンめ。」

「帰ったらまたお仕置きして……あ、先輩達をほったらかしにしてた。」

「謝らないと」

「すみません。ちょっとドライブは諸事情により引つ込みました。後あいつの言ってた事は気にしないで下さい。只の戯れ言です。」

「そ、そう。まあその辺りは追及しないでおくわ。」

「そうして下さい……ん？アジア？」

「イツセーさん……ドライブさんに酷い事しちゃダメです。」

「ぐっ……いや、あのねアジア。あれは「ダメです!?!」……」

「……うう、了解しました。」

「『……アジア・アルジェントオオ。ありがとお……ありがとお……うおおくん（泣）。ようやく相棒の横暴を止めてくれる奴があ。お前は俺の恩人だ。うおおくん（感涙）』」

「このクソトカゲがあ#。」

「……アジアの知らない所でぜってー泣かす。」

あれからリアス先輩達の質問に答えていった俺。
まあ当たり障りのないような返答をしていったが……とにかく終わ
った。

で、早速悪魔稼業である契約を取る仕事をやる事になったんだけど
………何となく予想してた。

俺は原作イツセーみたいに転移陣が発動しなかった。
リアス先輩が言うには魔力が低すぎるらしい。

これを聞いた俺は前々から予想していた事に確信を持てた。
俺が変態仮面から貰った力はどうもこの世界の人達には感知されな
いみたいだ。

たぶん二次元が三次元を認識できないだとか何とかそんな所だろう。
要するに変態仮面から貰った力は何気に凄いと理解してくれ。

そんな話しはもう脇に捨てて……とにかく悪魔稼業に支障をき
たすのは問題だから俺はとりあえずアーシアと一緒に悪魔稼業をす
る事になった。

アーシアは魔力が豊富みたいだから俺と一緒に転移しても問題ない
らしい。

………羨ましくなんてないよ。
ほんとだよ。

俺だって仙術とか使えるもんね!?

ちなみに小猫ちゃんが仙術を教えて欲しそうな感じを醸し出して
いるけどなかなか言ってこない。

まあ……姉の事があるから仕方ないか。

彼女が言ってきたら教えてあげる事にしよう。

何はともあれ俺の悪魔ライフのはじまりです

驚愕の事実…発覚（後書き）

イツセーは気づいてません。

変態仮面から貰った魔力を使えば……転移ができる事を。
貰った力は感知されないだけで使う事はできるのに……
まあ、彼は……基本的にバカですから。
その内気づきません。

さて……次は日常パートを作ります。

最近、イツセーくんがエロから離れていつている。

これは由々しき事態だ。

だから日常でエロエロ成分を補給する。

具体的にはオツパイとかお尻とかオツパイとか太ももとかオツパイ
……… すいません。

脳がやられています。

勘弁を。

それでは

日常（朱乃編）（前書き）

色々やり過ぎるとマズいと思ったので………こんな感じにしてみました。

どうぞ。

原作豆知識

松田・元浜について

・イツセーの悪友。

松田は短髪…というか坊主に近いエロ野郎。イツセーによくエロD
VDとかを勧めてくる。

元浜はメガネを掛けた真性のロリコン。

ちなみにメガネは女のバストを計測できるスカウター。

桐生について

・今作ではまだ出てきてないがアーシアの友人。

彼女はよくアーシアにエロい事を吹き込む。

そのせいでアーシアが間違った知識を得てよくイツセーに迫る事がある。

その時イツセーは「何という匠の技!？」とよく驚愕する。

ちなみに彼女もメガネを掛けておりそのメガネは男性のムスコの長さ
を計測できる。

桐生曰わくイツセーは平均より少し大きいらしい。

………恐ろしい女だ。

日常（朱乃編）

朱乃編？

「朱乃さん！約束です。オツパイ揉ませて下さい！」

「あら…そういうば約束してましたわね。……………丁度今は2人ね。」

今、部室には俺と朱乃さんの2人。

木場と小猫ちゃんは契約取りに。

リアス部長はアーシアの契約の仕事の付き添い。

アーシアの仕事振りを直接見たいからだそうだ。

俺の報告だと私情が混ざっている場合があるからな。

それで今は朱乃さんと2人きり。

そこで俺は悪魔に転生する時に朱乃さんに言われた事を思い出し切り出したのだ。

ん？直接過ぎ？

気にすんな。

それが俺だ。

「けどイツセーくん……………揉むだけでいいのかしら？」

……………なんだと？

「あの時言ったように……………好きに貪ってくれて……………いいのよ。」

「それは……………あの……………つついても……………いいんですか？」

「いいわよ」

「……………挟まっても？」

「もちろん」

「……………吸っても？」

「ええ」

……………ブハッ（鼻血）

何だそれ……………何だこれ……………俺今……………起きてるよな？
夢じゃないよな？

……………痛い。

ほっぺた抓ってもイタイ。

……………現実だ。

「あの……………朱乃さん。そんな事言ったらマジでヤりますよ？」

一応再確認。

「ふふふ、信じられない？けど……………本当よ。私、SでもあるけどM
でもあるのよ。責められる時は激しくされた方が燃えるの。だから
……………いいわよ。」

Mな朱乃さん……………ヤバい……………鼻血が止まらない。

「こっに見えて私、イッサーくんの事は結構気に入ってるの。反応が
可愛いし。もし初めてを上げるならイッサーくんみたいな子に上げ
たいわね。」

やめて!?

もう俺のNP（忍耐ポイント）は限界よ!?

「イ・ツ・セイ・イ・くん。……………ぶっぞ。」

朱乃さんが俺の前に……………。

俺は……………やる!

俺は退かぬ!

俺は媚びぬ!

俺は省みぬ!

例え…この身が朽ち果てようとも朱乃さんの究極の和乳オツパイを揉みしだき、挟み、つつき、吸いつけるなら!後悔なぞするものかあ!!!

「朱乃さん!イきます!?!」

「……………つつ。」

俺の両手が

真っ赤に光るウ!

和乳を揉めと轟き叫ぶう!!

必イ殺ウ!?!

パイリング・フィンガー!!!!

モミ……………モミモミ……………モミモミモミ……………

「っん、はあん」

朱乃さんの色っぽい声が俺の耳に……………
だが…まだまだア!

必イ殺ウ

牙突ウ!

ツン…ムニユ、ツンツン…ムニユムニユ……………

「あふう…いやん」

朱乃さんが微かに身じろぎをした……………だが!
まだだ!
倍プツシュだ!?

必イ殺ウ!?

ダイブ_ての和乳ウー!

ポニユン……………グリグリグリグリ……………

「っうん……………イッセーくん…可愛いわあ」

朱乃さんが頭を撫でてきた……………
チヨ―幸せなんですけど……………

だが!?

この技は連携技だ!

次に繋がる!

これが!

俺の!

切り札だ!?

必イ殺ウ!?

ランペイジィ!イートウー

ガラッ

「戻ったわよ朱乃、イツ……………何してるの?あなた達は?」

「ああ!?!イツセイーさん!何をやっているんですかあ!」

「あらあら 残念だけどここまでね。(パッ)」

「フギヤッ」

朱乃さんが急に離して身体をどけた為、頭を埋もらせていた俺は床にダイブ。

……………しよんな(泣)。

あそこまでいって……………あんまりだあ(泣)。

「うおおん！この世に神も仏もいないんだあー……。……………」。

「あ、イツセイさん！何処に行くんですかー……………」

「えっと……………お邪魔してしまったのかしら？私達？」

「いえお気になさらず。（少し危なかったわね。あのままだと私も歯止めが効かなくなりそうだったわ。でも……………」

「どうしたの？朱乃？」

「……………ねえリアス。もしイツセイくんを頂戴と言ったら……………くれる？」

「あげないわよ。イツセイは大事な眷属なの。朱乃でも無理よ。」

「残念（この反応だと男女間ということなら問題なさそうね（（

「変な朱乃。」

「ぶぶつ。」

「うああん（泣）。ドライブのバカヤロー……………」

「だから何で俺に当たりに来るんだア……………」

おわり

日常（朱乃編）（後書き）

まあ……私の作品ではこれが精一杯です。
というか書いたら検閲に引っかけりそうだから途中でやめて修正しました。

期待した方々。

申し訳ないです。

ちなみに作者は朱乃大好きです。

リアスも大好きです。

この作品のキャラは殆ど好きです。

誰を優遇するとかはあまりないです。

その時その時で衝動書きします。

とりあえず次に進みますか。

リアスの乙女キャラを書きたいからね。

それではまた。

原作豆知識

悪魔稼業について

・リアスのやり方で話します。

使い魔にビラを配らせます。

ビラを受け取った人が要望を書くと紙を通じてリアス達に連絡たぶんが行きます。

それを受けたリアス達が要望に適してそうな眷属を派遣させ依頼者

の願いを聞く。

ただ願いを聞く代わりに何か対価を要求。

それを依頼者が払えば願いを叶える。

こんな感じですか。

言い伝えみたいに魂とかを要求なんて事はしません。

現悪魔達の殆どはクリーンな契約をしています……たぶん。

リアス達はかなり優しい契約取りみたいです。

例をあげるなら

小猫の場合、ロリコン野郎から殆どだけ要求してくるのはコスプレしてくれとか小猫に持ち上げて欲しいとか。

そんな程度で対価はそれに見合った金銭・貴金属類とかです。法外な要求はしません。

余談ですがイツセーの顧客は何故か変態やらアクの強い野郎ばかりで無茶な要求ばかりしてきます。

なのでイツセーが契約を取ってくることは殆ど無い。

これは……話しに出てくる……かな？

ちなみに何故こんな事をするのかというと階級を上げるため。

契約を多くとれば眷属悪魔は上に。

眷属悪魔が多く契約を取ってくれば主の評価が高まり更に……

……といった感じ。

ただこの契約で上がるといっものは滅多にないらしいです。

大抵上級悪魔に昇格するには何か大規模な戦闘で活躍する、もしくは《レーティングゲーム》という悪魔の世界で主流となっているゲームで活躍する……ですね。

レーティングゲームは作中に必ず出ますのでその時にまた説明します。

以上です。

部長はいつだって過激なのさ(前書き)

豆知識

今作のイッセーの基礎鍛錬について

・サンデーに掲載されてる《ケンイチ》の特訓と似たようなものと考えてくれればいいです。

原作豆知識

《雷の巫女》について

・リアスの《女王》である朱乃の2つ名。
彼女が雷の魔法を得意としてる所から由来。

とりあえずこんな感じ。

それではどござ。

部長はいつだって過激なのさ

「イツセー……いいわよ。来なさい」

「……いいんですか（ゴクリ）」

「ええ。あなたが……欲しいの。」

ブツ！？

……鼻血が……

今俺の目の前に一糸纏わぬリアス部長がいる。
妖艶な微笑みをしながら俺を誘っている。

部長のオツパイが……先端が……
ムッチリした太ももが……

目の保養どころか目の毒になる光景だ。
だが目は部長に釘付け状態。

こんなシチュエーションで目を背ける奴は漢じゃねえ。
俺のムスコもスタンバイOKで「いつでもイケるよ、ダディ！」と
語りかけてきやがる。

……この世界に生まれて苦節17年……遂に……遂に俺は……
さくらんぼを捨てる時が……（泣）。

親父……お袋……俺……今から大人になります！

「部長！？」

「ふふふっ」

「兵藤一誠……推して参ります！？うっひょ」

必殺!?
ルッパアンダ〜イブ

.....スカッ

「へっ?」

あれ?

部長?

あれ?

いない.....あれ?

さっきまで在ったベッドが無い。

何?これ?

.....いつの間にか周りが真っ暗.....

.....まさか.....

『.....相棒?どうしたんだ?おまえまだ寝てるんじゃないのか?』

.....お

『相棒?』

お〴〵お〴〵おお

『ッ!?!?血の涙って.....はっ!?!?殺気!』

「ド、ライ、イ、ゲウウー.....ッ!」

『ちよっ、待て!?!?何でお前はいきなりキレてるんだ!俺は何もしてないじゃないか!?!?』

「うつるせえー！ー！ー！てめえ、もう少しで部長の肢体を堪能できるところだったのに！俺の初めてを捧げるところだったのに！絶対ゆるさねえー！ー！」

『知るかアー！ー！ー！どうせ夢を見てたんだろ！？たかが夢の事で八つ当たりするな！って、何で鎧を！？やめてくれアー！ー！』

「シネエー！ー！ー！ー！」

「イツセー？今日は何だか元気ないわね？どうしたの？」

「何でも無いです。ちょっと夢で……」

「そっ？ならいいけど。それじゃあとにかく始めましょうか。」

「はい。」

俺は今リアス部長と早朝訓練をしている。

部長曰わく

「魔力を上げるにはまず肉体からよ！とりあえずイツセーには早朝

訓練で基礎体力をつけて貰いましょう。」

という事らしい。

本当は鍛えてはいるから基礎体力はあるんだけど部長と2人つきり
でいられるという嬉しいシチュに俺は思わず賛成してしまった。

……訓練だけだな。

だけだな!?

嬉しい特典だつてあるんだぜ!

腕立ての時に部長が俺に乗ってくるんだ。

……背中越しではあるけど部長のお尻の感触が……やーらかい
な。

「……何か邪念を感じるわね?(ジロツ」

……キノセイジャナイデスカ(汗。

「全く(呆)。というかイッサーに基礎体力の訓練……いらんか
しら?」

なっ!?

何を仰ってるんですかあ!?

「部長……いきなり何を?……俺……いらなくなっただんですかあ(泣
泣)」

「違うわ。イッサーがいらんなんて言わないから安心なさい。さ
つきの意味はね、あなた私を乗せて腕立て何回してると思ってるの
?」

へっ?何かおかしいのか?

「……えっと…大体…1000回ぐらいですか？」

「……そうね。それじゃあその前の腹筋は？」

何が言いたいんだろ？

「普通の腹筋ですよ…1500回ぐらいじゃないですか？」

「……そう。更にその前の…100mダッシュを何回してる？」

あれは……

「往復で…50回…？」

そんなもんだったよな？

「……それだけやって何であなたは少し息が切れているだけなのよ？基礎体力ありまくりじゃない。だから必要ないって言ったの。わかった？」

え〜？だってあれぐらいなら子供の頃にやった訓練と一緒にだもん。

……マズいなあ。

このままだと部長と一緒にいられる時間が減っちゃうなあ。

『なあドライブ。何かいい案ないか？』

『知らん。俺は今不機嫌だ。何も喋らん。』

あらら、拗ねてるし。

『いい案を出したらしばらく八つ当たりしなくなるぞ。逆に出さないと……俺のイライラが募って八つ当たりの回数が増える。どっちがいい？』

『グツ……………くそ。…………お前がいつもやってる鍛錬をすればいいだろう。リアス・グレモリーには1人ではサボってしまいそうだから監視という形でしてもらえ。ついでに腕立てはいつもの大岩ではなくリアス・グレモリーに乗って数を倍にすればいい。』

おお、流石。

ナイスだよ、ドライブ。

『サンクス。お礼に八つ当たりはしないでやろう。……………お仕置きはするがな。』

『おい！？それは結局俺を殴る事には変わりないだろ！卑怯だぞ！つて無視するなあ！？』

はいはい、無視無視。

よし、部長に早速提案しよう。

「部長。ちょっといいですか？」

「うん？何かしら？」

部長との時間は無くしたりはしないぜえ！！

くくく

今日も1日楽しいな

「イツセーさん。何だかご機嫌ですね。どうしたんですか？」

「そう？そう見えちゃう？デヘッ、いや、表情に出ちゃってたかあ。」

参ったなあ。

ちゃんと表情戻さないよ。

「……………？」

あら、アーシアが首を傾げてるし。

しょうがないなあ、教えてあげようではないか！

「いや、実はさ。今朝の部長との早朝訓練をしてたらな……部長に「もっと自分の体を大事にしろさい！」って言われてギョツと抱き締められたんだよ。……………部長のオツパイ……やっらかかったあ。」

……………あ、あの部長の胸に顔が埋もれた瞬間……………え、匂いやった……やっらかかった。

ん？アーシアさん？

何でそんなに頬を膨らましてるの？

……………可愛いだけなんですが？

「私もそれぐらいできます！イツセーさん！ドンと来いです！」

「……………いや何でさ？」

「そんな両手を広げられても……………」

「何か小動物みたいで可愛いんですけど、この子。とりあえず教えてあげよう。」

「あの…アーシア……………もう学校に着いたからね。」

「……………はう！？」

「あーら、真っ赤になって縮こまったし。」

「……………ほんとこの子……………可愛いな。」

「イツセー……………貴様…裏切ったな（血涙）」

「あり得ん……………あのイツセーが…世界崩壊の前触れか？」

「お前ら……………言いたい放題だな、こら。」

「俺は現在悪友の2人、松田と元浜に捕まって尋問されています。」

「発端はアーシアと一緒に登校した事だ。」

「こいつらどっから聞いたのか知らないがそれを知っていて俺が教室に入った途端に絡んできた。」

「やれやれ、醜い奴らだ。」

ここはいつちよ……………漢の余裕というものを教えてやるつではないか。

「お前ら……………金髪美少女に起こされるといふ至福の一時……………味わった事はあるか……………フフン。」

「……………なっ、そんな……………馬鹿な……………イツセーおまえ……………」

「まさか……………おまえ……………アーシアちゃんと……………」

クハハハツ、信じられない顔をしてるな！

だが……………現実には時に残酷なモノなのだ！？
俺はアーシアを手招きで呼び……………

「何ですか？イツセーさん。」

「アーシアは俺の家に住めて嬉しいか？」

「はい！？当然です！お父さまもお母さまも優しいですし。」

「アーシアは毎朝俺を起こしてくれるもんな？」

「むう、イツセーさんは少しお寝坊さんですから困ってます。」

「親父もお袋もアーシアは気が効く良い子だって言ってたぞ。」

「そんな……………照れてしまいますよ……………エへへ。」

そこで俺は松田と元浜を見ると……………

「……………終わった……………世界に希望なんて……………無かった……………」

「俺……………もう死ぬわ……………イツセーなんか……………」

おーおー、真っ白に燃え尽きていやがるわ。

ん？……………他の野郎共も机に突っ伏してやがる……………ざまあ（笑）。

……………アーシアはクラスの女子に連れられて何か言われてるな……………

どうせ俺が野獣だの変態だから近づいたらダメとかだろ。

何とでも言っがいわ。

だって……………

「違います！イツセーさんはとっても良い人なんです！」

ほらな。

ふははは、野郎達からの嫉妬が心地良いわあ。

さあて授業の準備をしますかね。

「イツセー……………おまえエ……………夜道には気をつけるオ。」

「おまえを始末すれば……………アーシアちゃんも正気に……………」

おや？

負け犬2匹が何か言ってるな。

ん、聞こえんなあ（笑）。

あれから俺は野郎の嫉妬の視線を浴びながら放課後まで過ごした。
全っ然、効きませんが。
で、放課後になって部屋に行こうとしたら木場が来て今日は仕事は
休みだと言ってきた。
だから俺とアーシアはそのまま帰宅した。

「イツセー。私を抱きなさい。もっと言うなら私の処女をもらって
頂戴。」

「……………はい？」

え、今の状況を説明するとだな…………
晩御飯を食べた 部屋でゴロゴロしてた 床に魔法陣が出た 部長
出現 部長が俺に向かって過激な発言する 今ここ
です。

……………なるへそ。

例の件か。

原作の……………。

それでこのイベントなんですね。
分かります。

……………って、そんな事考えてる間に部長が服を脱ぎ始めたア!?

……………すごく…エロい身体です。

スゲー……………あんなに大きいのに全然垂れてない。

ピンクの先端が美味しそう……
腰なんてキュツと引き締まって……リアル部長は夢の中の3倍はエ
ロい身体付きだ……やりたい……

「イツセー…早くしてちょうだい……ほら。」

部長が俺の手を取り至高のオツパイへ導いた。
俺は反射的にモミモミしちゃった。

………弾力あります。

揉みごたえ抜群です！

ダメだ、これ。

これ以上は耐えれん。

早く来て下さい！

銀髪巨乳メイドさん！！

パアアアツ

魔法陣が……

助かったあ。

「部長……お迎え……ですか？」

「………みたいね。」

魔法陣からは銀髪巨乳メイドが現れました。

原作キャラ………魔王サーゼクス・ルシファアの眷属悪魔《女王》で
あり奥さんであるグレイフィアさん。

生グレイフィアさんを見た感想を言っぜ………

メイド服を押し上げ強調しまくってる2つのたわわな果実がスゴく
美味しそうです。

後メチャ美人。

……いいな。

サーゼクス様はこんな美人と結婚してイチャイチャできて羨ましいなあ。

……はあ。

……ん？何か視線が……グレイフィアさんが何か見てる？
それに何か部長……怒ってる？
何で？

「イツセー…まさか、この方が……」

……ああそういう事か。

グレイフィアさんが多分俺を貶したから部長は怒ってるのか。

……部長もまた優しい人だね。

俺なんかの事で怒ってくれて……。
で、グレイフィアさんは報告で聞いているから俺が赤龍帝だと知っている……と。

自己紹介しますか。

「初めまして。グレイフィアさん。泣き虫ドライブの主でありリアス・グレモリーの“最強（予定）”の《兵士》である兵藤一誠です。以後お見知りおきを。」

「イツセー…あなた……」

「……“最強”ですか。大きく出ましたね。」

いや部長…そんなに驚かんでも。

後、グレイフィアさん。

あくまで予定ですからね。

そんなに殺気を滲ませないで欲しいなあ

「……気配…漏れてますよ。上手く抑えているようですが。」

「……………」

あら、完全に引つ込めた。

ヒュ〜 流石は最強の《女王》。

“今の”俺じゃあ勝てないな、これは。

「……リアスお嬢様。行きましょう。」

「……え、ええ。わかったわ。私の根城で話しましょう。朱乃も同伴でいいかしら？」

「《雷の巫女》ですか。構いません。上級悪魔たる者、《女王》を側に置くのは常ですので。」

………帰るか。

転移が展開されたなあ……………

……………言っておこうか。

「リアス部長。」

「……………何？イッセー。」

「俺は笑ってる部長が大好きです。」

「えっ？」

「とりあえず今はそれだけっす。また明日。」

「イツ……」

「……行ったか。」

「さてと……」

『ドライブ。』

『何だ？』

『……暴れるぞ。今回はお前だな。』

『了解した。ならば敵に見せつけてやるうではないか。この俺の、
《赤龍帝》の力をな！？』

ドライブも初めての出番で張り切ってるな。
よっしゃ！？いっちょ、やりますか！

o t h e r s i d e

グレイフィアとリアス、朱乃は現在とある一室にて話し合いをしている。

簡単に説明するとリアスの婚約問題だ。

それをリアスが嫌だと突っぱねているため話しがいつまで経っても
平行線。

グレイフィアは今日はひとまず諦める事にした。
そしてグレイフィアは話しを変える。

「リアスお嬢様。あの《赤龍帝》の事ですが……」

「イツセーがどうしたの？」

「……かなりのやり手ですね。」

「……珍しいわね。グレイフィアがそう言うなんて。」

リアスは少し驚いた。

グレイフィアは最強と言われる《女王》。

更に言うなら魔王に近い実力の持ち主。

そんな彼女がそう言ったのだ。

朱乃も手を口に当て驚く。

グレイフィアは続ける。

「あなたが間違いではないのかも知れませんが。彼が言っていた“最強”の《兵士》というのも。まあ彼も“現段階”では最強とは思っていないようでしたが。」

そして驚いているリアスと朱乃に微笑しながら

「良い……相手を仲間にしましたね。」

そう言った。

リアスはそれを聞き少ししてから

「当然。私のイツセーは最高の《兵士》よ。」

と誇らしげに告げた。

朱乃とグレイフィアはそんなリアスを見て苦笑するのであった。

s i d e e n d

部長はいつだって過激なのさ(後書き)

何か前話の日常からいきなり話しが移った感じがして……しっくりこなかった。

違和感を感じた方々、申し訳ないです。
次からは出来るだけ気をつけます。

では

グレイフィアさん…コレクションに入る(前書き)

エロのさじ加減って難しいと痛感する毎日。

イツセーの性格のブレが激しいな……………申し訳ないです。
生暖かい目で見守って下さい。

どうぞ

原作豆知識

《銀髪ぎんぱつの殲滅女王クイーン・オブ・ティハウア》について

・グレイフィアの2つ名。

彼女の詳しい能力は私も知りません。

原作にもあまり表記してなかったような……………。

とりあえずグレイフィアは四大魔王と同じぐらい強いとっていいかと。

《レーティングゲーム》について

・爵位持ちの悪魔達が行う下僕同士を戦わせて競い合うゲーム
公式ゲームでは成人した悪魔しかできない。

ただし非公式なら未成人の悪魔でもゲームは出来る。

ちなみにリアスは未成人。

非公式の場合は大抵御家同士のいがみ合いや身内同士の戦い。
レーティングゲームはただ力が強いと言うだけでは勝てない。

戦場も様々で屋内であったり屋外であったりと変化するし、その時々で縛りルールが存在する。

簡単に例えて

街中が戦場になった時、建物を破壊しては失格：などがある。

これにより単に力の強い下僕を集めてもルールによっては不利に立たされる場合もある。

その為《王》である悪魔は戦術や策を張り巡らしたりする知識が必要とされる。

要は軍師みたいな感じ。

で、レーティングゲームは擬似戦争……かな？…それに色々ルールを付け加えているような物と思ってくれたらいいんじゃないかと。

後、レーティングゲームにはチェスの要素を取り入れたプロモーションが存在しています。

《兵士》が敵陣に入ると自身を《女王》、《戦車》、《騎士》、《僧侶》のいずれかに変化するルール。

ちなみに

《女王》 総合能力が飛躍的にアップ

《戦車》 腕力と防御力が飛躍的にアップ

《騎士》 速度が飛躍的にアップ

《僧侶》 魔力関係が飛躍的にアップ

だったはず。

これは下僕にする際の駒にも適用されます……確か。

《兵士》に関しては……プロモーションが特典になる以外は特になかったかと。

だから下僕にする時はこれらの能力特典を加味し駒を選ぶ必要がある。

例) 後方支援方の魔法使いだったものに《戦車》の駒を上げると防御力が飛躍的に上がり倒されにくくなる。

また《僧侶》の駒を上げると魔力関係が上がり後方支援が強化されるが逆にやられ易い……とかです。

その辺りは駒を上げる悪魔の好みになってくる。

とりあえずこんな感じですよ。
以上。

グレイフィアさん…コレクションに入る

……

……

え〜…非常に息苦しいです。

現在俺は部室にいます。

あれから1日経ってからの放課後。

俺とアーシアと木場が部室に入ったら部長、朱乃さん、小猫ちゃんが既にいてプラスでグレイフィアさんがいました。

非常に空気がピリピリしてます。

まあ……理由は分かりませんが。

部長が俺達を見て

「全員揃ったわね。部活の前に話す事があるわ。」

そう言ってきた。

グレイフィアさんが代わりに説明しようかと言ってきたが部長はそれを断った。

部長が説明しようとしたら部室に転移陣が展開される。

その魔法陣の紋様を見て木場が

「…………フェニックス。」

と呟いた。

俺はこいつには別段興味がないので……………グレイフィアさんのオツパイを視姦する事にしよう。

グレイファイアさんに会えるのは稀だからな。

見れる時に見ておく。

ジイ………あ、グレイファイアさんがこっち見た。

………手を振ってみよう。

………目礼したきた。

美人すぎる。

気品もある。

オツパイも大きい。

………サーゼクス様がマジ羨ましいな。

「放してちょうだい！」

ん？

部長が何か………何で焼き鳥野郎は馴れ馴れしく部長に触れようと
してんだ。

その人に触れていい男は俺だけだバーロー………

………少しイタイ目にあわせようかな？#

幻術使つて………気配をさり気なく殺して………後ろに回り………

………あ、グレイファイアさん気づいた。

だが、遅い！？

「ライザー様！？」

「ん？どうし「人様の主に馴れ馴れしく触れんな！？焼き鳥馬鹿が

アーーーーー！（ズグシュツ）ほわあ！？………オオ………オオ………」

「………なっ！？」「」「」

「グツジョブです。先輩。」

褒めてくれてありがとう小猫ちゃん。
でも…………野郎に流腸をかますのはこれっきりにしとく。
手袋を装着すりゃ良かった。

「イツセーあなた!？」

やばっ。

怒られるかな。

こんなんでも確か貴族だった筈だし。

「部長勝手な真似してすいま」よくやったわ!? 流石私の眷属悪魔
ね!」…………いえ、自分の主に危害が及びそうだったので当然の事
をしたままでです。(キリッ)」

……………「ここは流れにノっておこう。

俺は空気が読める良い子なんだ。

「き、貴様アーツ!!」

あっ、焼き鳥が復活した。

腐ってもフェニックスか。

すぐに回復したし。

まあ相手をしてやるか。

「申し訳ない。どごぞの変態糞虫ナルシスト野郎が自分の主にチン
○すまみれた手で触れていたのを見てしまいましたのでつい排除活
動に勤しんでしまいました。あ、すいません。言葉が過ぎましたね。
これは悪い事を言ってしまった……………糞虫に(笑)。」

「殺す!?! 絶対に殺す!?!」

「何です？」

「あのような行動そして言動は控えるようにしてください。リアスお嬢様の「嫌です。」……………」

目を細めて殺気を滲ませるグレイフィアさん。

いやだつてなあ……………」

「言動と行動は治しますが似たような状況があれば俺はまた相手に突っかかりますよ。だって自分の主が嫌がつているのにそれでも迫る不躰な輩なんですから。なら下僕の俺としては主を守るのが当然の事でしょう？だから嫌だと言ったんです。ちなみにその相手が誰であるうとね。これで納得出来ないなら実力行使をしたらいいですよ。“今の”俺でも勝てないまでも手傷ぐらいならあなたに負わず事はできますよ。」

「……………」

「……………」

見つめ合う……………じゃない。

睨み合う俺とグレイフィアさん。

部長や朱乃さん達は固唾を飲んで見守っている。

そらそうだな。

グレイフィアさんに喧嘩売ってるようなもんだし。

あの《銀髪の殲滅女王》（銀髪のクイーンオブデバウア）と言われる最強の女王に。

「……………貴方のその自信……………赤龍帝を宿しているからですか？」

「そつだと言ったら？」

再び見つめ…ゲフン、睨み合う。
数秒の間、沈黙が支配した後……俺は……

「グレイフィアさん………ブラジャーしてますか？」

気になっていた事を聞いてみた。

あれ？部長達が何か驚いてる。

あれ？ライザーまで。

何かおかしかった？

だってグレイフィアさんのメイド服にうつすらとね浮き上がってるんだよ、先端が。

気になって仕方ないんだよ。

「今はしておりません。それが何か？」

………

「マジですか!?!」「」

グレイフィアさんのまさかの返答に俺とライザーが思わずハモった。さっきまでの緊張した空気が一気に霧散した瞬間だった。

あのグレイフィアさんの衝撃の発言の後は何やかんやでグレイフィアさんの指揮の下で話しが進み、ライザーと《レーティングゲーム

《で白黒つける事になった。

話し合いが終わった後、ライザーといつの間にかいた眷属悪魔達が去っていった。

去り際にライザーが俺に対して何か言っていたが俺は全く聞いちゃいない。

ちなみに話し合いも全く聞いてなかった。

何故ならグレイフィアさんのブラしてない発言により俺はひたすらグレイフィアさんのオツパイをガン見していた。

浮き出てる先端から大きさ等を想像（妄想）、グレイフィアさんの綺麗な肌を視てオツパイをガン見してリアルオツパイを想像（妄想）する作業に没頭しまくっていた。

だから聞いていない。

だがその甲斐あってグレイフィアさんの美乳であり巨乳であるオツパイを完璧に再現できた……………脳内で。

後は今まで聞いた声音と俺の類い希なる想像力（妄想力）でグレイフィアさんとのエア〇ツ〇スが可能となった。

俺めっちゃ頑張った。

そんな俺を余所に部長達が何やら相談し合っていた。

……………あるえ？

俺…仲間ハズレですか？

……………クスン。

いいもん。

部屋の隅でイジケてるもんね〜（泣）。

……………ん？グレイフィアさんが何かこっちに来た。

……………歩く度にオツパイ揺れてる。

俺の脳内では変換されて生乳が揺れてるがな。

グレイフィアさんが俺の前まで来て……………

「イッセー様。申し訳ありませんでした。」

頭を下げて謝罪してきた。

……………何で？

「え〜と……………謝罪される意味が分かんないんですけど。」

俺がそう言つとグレイフィアさんが謝罪の意味を教えてくれた。

その理由は

俺の軽い挑発に乗りそうになり攻撃を仕掛けた可能性が高く、それを行えばここら一帯の被害が甚大になっていたが、その前に俺が先に矛を収めてくれたから良かった……………ということらしい。

………………すいません。

あれ…マジ質問でした。

俺は慌てて返答。

「いやいや！？あんな事暴言吐いた俺も悪かったですから。

グレイフィアさんが謝る事は無いですよ。むしろ謝るのはこっちです。俺こそ本当にすいませんでした。」

「ではお互いが悪かったということにしましょう。」

「……………むう。グレイフィアさんは本当に悪くないのに……………まあ、あなたがそう言うならそれで。」

彼女の言葉に俺がそう言つと……………グレイフィアさんは微かに微笑んだ。

………………思わず見入った俺。

見入った俺に一礼し踵を返したグレイフィアさん。

だが何かを思い出したかのように振り返り……………

「イッセー様。あまり女性の胸を凝視するのは好ましくありません。

控えるようにした方がいいと忠告しておきます。」

と告げ部長に何か言って転移で帰っていった。

……… やっぱ気づかれてましたね。

そりゃあんだだけガン見してたら気づくよな、普通。

まあいいけど。

「イツセー! ? 何してるの。早くこっちに来なさい。あなたも話し合いに参加しなくちゃダメでしょ。」

とりあえず目先の合宿とレーティングゲームに励みますかね。

……… リアス部長の幸せの為に。

こうして原作と同じくライザー・フェニックスとのレーティングゲームが決まったのであった。

……… 今日の夜はグレイフィアさんとのエアセ〇〇スで一発頑張るぜ!

o t h e r s i d e

「そうか。リアスとライザーがね。分かった。ありがとう、グレイフィア。」

「いえ、仕事です。」

紅髪の青年……四大魔王であるサーゼクス・ルシファアの言葉に恭しく一礼し返事をするグレイフィア。

サーゼクスはグレイフィアを見て

「それより何かあったのかい？グレイフィアにしては少し気分が高揚してる感じがするけど……。」

と尋ねた。

グレイフィアは少し考えた後……答える事にした。

「イッセーとのやり取りを。」

そして……

「もしあの場で彼とやり合えば……勝てはしたでしょうがかなりの深手を負ったかと思われます。……高揚していたのは久しぶりに強者と相対したからです。」

と答えた。

サーゼクスは少し驚いた後……静かに笑い出し

「それはゲームが楽しみになってきたね。その彼がどう活躍してくれるのか……とても楽しみだ。」

と呟いた。

グレイフィアは何も言わずに静かに佇んでいた。

s
i
d
e

e
n
d

グレイフィアさん…コレクションに入る（後書き）

原作豆知識

ライザー・フェニックスとフェニックス家について

・ライザーはフェニックス家の三男。

下僕である悪魔達は全て女性。

下僕でハーレムを築いたナルシストでキザな野郎。

リアスとの婚約も政略結婚で家名を上げる事の方を重要視している感じ。

一応リアスにも好意はあるがそれはリアスが美人という理由。

フェニックス家は《不死身》という特性があるためレーティングゲームで大活躍し台頭してきた御家。

この《不死身》特性は彼等がどんな傷を負っても炎を纏い瞬時に傷を直し復活するからレーティングゲームでは最強の一角と言われている。

ただ倒せないわけではない。

不死身ではあるが再生する度に疲弊するため幾度も攻撃を繰り返して続けていきフェニックスの精神をすり減らし続けていけばいつかは“心”が折れて気絶したり降参したりするから。

また圧倒的な一撃を繰り返して一気に押し潰し“心”をへし折るのも有効な手。

けどこれは神や魔王クラスの攻撃をしないといけないらしいです。ちなみに今まで悪魔同士で戦いをした事がないため悪魔達は不死身というのがどれだけ厄介か理解していなかったらしく、ゲームでその厄介さが浮き彫りになりようやく気づいたと原作では語られている。

後ライザーは不死身という事にかまけて自己の鍛錬を疎かにしている節があるし、現在の彼はかなり増長気味。

何気に親もこの事について頭を悩ましている。

ライザーの親は原作で少ししか出てきていないが割と良い人っぽい。

こんな感じですかね。

ああ、後悪魔の家とかは七十二柱の悪魔とかを参考にすればいいか
と思います。

それと下僕＝眷属悪魔です。

もう一つおまけにリアスの家はリアス自身も含めて下僕……眷属悪魔を家族みたいに大事にする傾向があるようです。

大抵ははつきりした主従関係みたいな感じ……らしいですよ。

それではまた〜。

恥ずかしくて言えるか！（前書き）

やっぱり文が上手く纏めれんな。

読んで下さる方々

長い上にあまり要領が分からない作品で申し訳ないです。

とにかくどうぞ

恥ずかしくて言えるか！

「いいですか、アーシア。年頃の男が風呂に入っている時に年頃の女の子が全裸で入ってくるなんて事はやってはいけない行為なんです。」

「でもでも仲良くなるには裸の付き合いをした方がいいって教えて下さったんです。私、イツセーさんともっと仲良くなりたいです！」

「いやね、その仲良くなるはまた違った意味で……その……「どういう意味ですかあ？」……いや……その……っていうか裸の付き合い云々をアーシアに教えたの誰？」

「桐生さんです。」

桐生ウーッ！

アーシアにいらん事を教えんなやアー……ッ！
ちつくしょう！

そっぴいや原作でも同じ事があつたな！

すっかり忘れてたア。

ここは強引に押し切るしか……

あっ？

状況がわかんない？

仕方ない。

簡単に説明しよう。

俺入浴中 アーシアが誰も入ってないと思い風呂場にin（もちろん全裸） バッタリ遭遇 アーシアが出ていくと思ったら顔を真っ

赤にしながらそのまま入ってきた。慌てた俺はすぐに出た。両者が
出た後、アーシアに事情聴取等始める。今このあたり

つてな感じ。

余談だが……アーシアと風呂場にいた所をお袋に見られた。

奴は「孫が!? 遂に孫がアー!？」とか叫びながら親父の所に行き
やがった。

……後で弁解…頑張ろう(泣)。

それより今はアーシアにちゃんと説明をしないと。

俺はアーシアには純真無垢なまま育つて欲しいんだ。

原作みたいに天然エロキヤラに育てさせはしない!

後、アーシアを嫁にはやらん!

男を紹介なんてしてきたら嫌われる覚悟でアルトのバンカー打ち込
んで塵に帰してやるわ。

つとこんな事言ってる場合じゃあ…

ガラッ

「何やってるの? あなた達。痴話喧嘩?」

「あ、部長さん。」

「あ、ども。それと痴話喧嘩じゃないです。アーシアの教育中です。
それよりどうしました?」

まあ知ってるけどな。

たぶん修行合宿のお知らせ……あれ? 確かあれって明日の朝に言い
に来るはず…今、夜だよな?

何でこんな早くに?

「明日の朝一で山へ修行に行くわよ。アーシアはともかくイツセーは早めに言っておかないと碌な準備をせずにやってくると思ったから手伝いにきたわ。」

……………何ですと？

あ、アーシアが準備で出て行った……………ってそれより!?

「部長！異議ありっす！！俺だってそれなりに準備できますよ！」

部長は何て事を言っんだ!?

これでも子供の頃は連休の度に山へ鍛錬しにいったんだ！
むしろ部長より詳しいわ!?

「じゃあイツセー。あなたが用意する物をリストアップしてみなさい。はい、ペンと紙。」

いいですよ。

確認した後はちゃんと見直してくださいよね。

えっと……………まずは夜のオカズにエロ本数冊いるよな……………後は
ティッシュも完備しないと。

次に飯関係は……………蛇とかカエルとか鳥とかいるから別に問題ない。

あ、楽に火を点火するためにライターだけ持っていくか。

衣類は…着てるやつを水洗いして着回したらいいからいらないうと。

飲み物保存用にペットボトルがあるな、2リットルのでいいか。

寝袋は……………結構暖かいから別にいらないうな。

もし寒けりゃ葉っぱとか敷き詰めたらいいし。

意外にあれ暖かいんだぜ。知ってたか？

他は……………ないよな。

あれ？でもよくよく考えれば今回って部長達とするから宿舎みたいな
なのがあるんだよな？

なら……ライターとかペットボトルとかいらないじゃん。
ティッシュもありそうだよな。
消しとこ。
となると

・エロ本数冊

だけだな。

おお！？過去最高のお手軽な荷物になった！
いや世の中便利になったものだな、うんうん。
じゃあ提出つと

「はい、部長。書けました。」

ふふん

さあ見直して下さい、部長！

……あれ？何か口元をピクピクひきつらせてる。

「……………イッセー……………何でこうなったか……………説明して頂戴……………」

説明ですか？

いいですけど……

……………説明中……………

「で、そんな感じで絞っていったらそれだけになりました。どうですか？納得できましたよ？……………って、何で頭を抱えているんです？何か問題ありました？」

「イツセー……あなたの準備は私がするからあなたは何もしないで。
………やっぱり来て正解だったわね（ボソツ）」

………何で？

つてなわけで修行合宿にきたぜ！！

場所はとある山にあるグレモリー家所有の木造の別荘だ。

というかよく考えればグレモリー家って人間界にも別荘をいくつか
持ってるんだよな。

パネエな。

まあこんな事で驚いてちゃこの先やってけないけどさ。

ちなみに移動にはグレモリー特有の転移で一瞬です。

後、各地の別荘は普段は魔力で風景に隠れて人前には現れないよう
にしている。

魔法って便利だよな。

いや仙術も便利だけどね。

今は女性陣が動きやすい服装に着替えにいつてる。

木場も。

ただあの野郎、着替えに行くときに

「覗かないでね。」

なんて言いやがった。

誰が野郎の着替えなんぞ覗くか！？

ったく。

俺は既に着替えてリビングにいる。

男の着替えなんて早いものだ。

ちなみに私用の黒ジャージだ。

たぶん皆は学校指定の赤ジャージだろうな。

『相棒。』

ん？何だ？

『どした？』

『今回の犠牲者はあのフェニックスでいいんだよな？』

……………犠牲者って何だよ……………ツッコみたいけどスルーしてこ。

『そうだな。あの小物臭がプンプン臭う焼き鳥野郎が今回の獲物だ。それが何か？』

『いやな……………お前、俺の出番だと言ってたが幾ら俺でも今の状態のセイクリッド・ギアだとフェニックスは倒せんぞ。そこが疑問でな。どうするんだ？』

『あゝそれな……………悪いけどお前の力はフェニックスとの戦いじゃなくてその前の眷属達で使う。フェニックスには俺の換装でケリをつける事になるな。あれも説明上ではお前の力になってるし。……………嫌か？』

『いや、妥当な所だろ。別に構わん。』

『悪い。ブーステッド・ギアが《禁手化》バランスブレイクしてたら良かったんだけどな。』

『《禁手化》を知っていたのか？』

あら、驚いてんな。

そりゃそうか。

つい最近まではセイクリッド・ギアが発動してなかったから説明もクソもなかったからな。

一応言っとくか。

『大抵の事は知ってる。ブーステッド・ギア的能力がどんなのか、セイクリッド・ギアは所有者の想いに応えて強くなるとか……後……お前ら二天龍特有の《覇龍》ジャガーノート・ドライブの事も……な。』

『……どこでそれを知った？』

『秘密………だけど、いつか教える時がくる………たぶん。こなかつたら教えんが。ま、気にすんな。要は俺が相棒であるお前を必要としてるって事だ。………的としてな（ボソッ）』

『聞こえてるからな。………まあいい。それについては気長に待っているでしょう。………だがな知っているようだが重ねて忠告しておく。長生きをしたければ《覇龍》ジャガーノート・ドライブは使うな。あれは絶大な力を得る代わりに所有者に死をもたらす代物だ。いいな？』

『心に留めとくよ。サンキュー。』

………《覇龍》か………俺はどうやって解き放とうかね………負の遺産………歴代の先輩方の怨念を。

ドライブとの会話を終えた丁度に全員がリビングに集まった。
部長の号令の下、早速修行開始！

Lesson?

木場と模擬戦もどき

騎士のスピードがどんなものか体験しなさいという部長からの指示で、今やっています。

「フハハハハッ、木場よ！？俺を捉えられるかな！見よ、これがあの伝説の……………《残像拳》だ！？」

「なっ！？速い！？……………んだけドイツセーくん……………それただ反復横飛びしてるだけだよな？」

っっ！？

初見で見破るとはやるじゃないか……………流石は騎士だけの事はあるな……………あ、バカ。そこに木刀なんて添えたら！？

「ふむやッ！？」

「……………捉えたよ？」

……………うるせい……………それとイタイ（泣）。

Lesson?

朱乃さんとの魔力修行

俺は魔力が低いだけであるにはあるからその使い方を学ぶために朱乃さんから教えてもらえと部長からのお達し
今、教えてもらってます。

「朱乃さん。やり方が全くわかりません。もう一度教えて下さい」
「キリッ」

「ふふ、いいわよ。こうやって…手を翳して……………前に出した両手に……………」

ふにょん、ぽにょん

によほほほっ

魔力放射のやり方を今教えてもらってんだけど……………朱乃さんつては後ろから俺の手を支えてくれるからオツパイが身体に当たってるんですよ。

はあ〜……………や〜らかい。

至福の一時……………。

「はい、やってみて。」

ああ……離れちゃった……（ガックリ）。
はあ、やりますか……

「おりゃっ!」

ポシュンッ

前方に翳した両手から間抜けな音がした………笑うな!?

「ま、まあ要練習ということよ、イツセーくん。頑張りましょう。」

………朱乃さんの慰めが心に染みる（泣）。
俺……“この世界”の魔力は最低レベルだからなあ………ハア。

Lesson?

小猫ちゃんと格闘技の訓練。

俺は兵士だから前衛になるため近接戦闘は必須。

なので格闘技全般がプロレベルの小猫ちゃんと訓練しなさいと部長
からのお達し。

で、今は……

「さあ、カモン小猫ちゃん!俺はいつでも準備OKだよ!」

「……………」

小猫ちゃんが半眼で俺を見てる。

あれは……………蔑みの視線。

クーデレでロリーな小猫ちゃんからのあの視線……………少し…か・い・か・ん

ちなみに俺はM字開脚しながら寝そべっている。

そう……………これは寝技の特訓だ！

寝技だって立派な格闘技！

柔道、プロレス、レスリング、コマンドサンボ、セクシーコマンド

ー、陸奥圓明流……………様々な格闘技に組み込まれている立派な格闘技！

決してロリーな小猫ちゃんと組んず解れつイヤんな事をしたくないなんて微塵も思っぢゃいない！

だから……………早く来い！？

キタアーーーーー！！……………あれ？何で止まったの？

え？何でサッカーボールを蹴るようなポーズを……………しかもトウー

キック気味？……………はっ！？まさか！？

「……………変態。」

カキーン！

ツツツ！！？？

……………ふお……………おおお……………

リアスside

リアスは現在リビングにて頭を悩ましていた。原因は言わずもがなイッサーについて。

朱乃、木場、小猫からの特訓報告でイッサーが真面目にやっている事（本人は結構本気だが）にだ。

「あの子だってやればできるのに……………何で……………」

リアスはそう呟いた。

リアスは早朝鍛錬でイッサーがどれだけ体を鍛えているか知っている。

基礎鍛錬ばかりだがイッサーがどれだけ過酷な鍛錬をしているか知っている。

自分が提案したメニューを楽々とこなしていたので早朝の鍛錬はいいかと思つた時にイッサーがいつも自分がやっている鍛錬をいいかと言つてきたのでOKを出したら……………想像を遥かに超えていた。

腕立ては私を乗せる所は同じだったが回数が倍だった。

これは別段良かった。

次からだつた。

腹筋をするにあたり……………太い木の枝の下に大きな焚き火をした後、その真上で木の枝に足をひっかけて行つた。

一歩間違えれば全身が（特に顔が）大火傷を負いかねない。

スクワットをする時には目測で重さ500kgぐらいありそうな大岩を背負いながらゆっくりと行つていった。

これもまた下手をすれば大岩に押し潰されてしまう。

他にもあるのだが一番酷かったのが……………走る電車を待ち構え目先寸前で避けるという行為だった。

これをやろうとしたイツセーを必死に引き止め怒りながら何故こんな事をするのか問いただすとイツセーは……………

「時間の流れを遅く感じる修行つす。ほら走馬灯を感じるとかあるでしょ？あれを掴む為の鍛錬です。大丈夫。最初は轢かれたりして死にかけましたけど最近は余裕で避けれるんですよ。そろそろ新幹線に挑戦しようと思ってます。」

とあっけらかんと言ったのだ。

これを聞いたリアスは思わずイツセーを抱き締め

「もっと自分の身体を大事にしなさい！」

と叱ったのだ。

この時にリアスはイツセーの訓練には監視をつけないと駄目だと思っただのだ。

だから今回も誰かと組ませて特訓させた。

結果が昼の様な感じ。

リアスは悩む。

どうすれば真面目に取り組んでくれるのか？と。

その時……………

キィ、ボタン

玄関から音がした。

リアスは誰か出て行ったのか？と思い玄関に行った。すると……………

(イツセーの靴がない……………どこに……………まさか!?)

リアスは急いで靴を履き外に飛び出す。
だが既に影も形もない。

リアスは即座に使い魔である赤いコウモリを喚びだしイッサーを探せと命じた。

使い魔の報告を待っている間にリアスは思った。

（イッサー……もし約束を違えたら……叱るだけじゃ済まないわよ！）

と。

10分程度して使い魔が戻ってきた。

無事イッサーは見つかったと。

場所はここより少し離れた川岸。

リアスはすぐに向かった。

到着すると……イッサーはすぐに見つかった。

川岸で胡座をかいて座っていた。

少しほっとしたリアス……だったが次の瞬間

ブシュッ！

イッサーから血飛沫が舞い上がった。

「なっ!?!」

リアスは驚愕する。

咄嗟に周辺を見る。

誰かの攻撃か？と。

しかし誰もいないし気配もない。

その間にもイツセーから更に血飛沫が上がる。

訳がわからない事が起き呆立ちになるリアス。

そして……………

グラア……………バシャーン

イツセーが川に倒れ込んだ。

その音をキツカケに我に返ったリアスは慌ててイツセーに駆け寄り川から引きずり出す。

幸いにもここは浅い。

深かったら危なかった。

リアスはイツセーを岸まで上げて座り込み容態を見る。

(これは……………切り傷？いえ違うわね。何か引き裂かれた痕……それに火傷……………何故？)

イツセーの頭を自身の太もものにのせて考えるリアス。

そこでイツセーの左手にブーステッド・ギアがいきなり展開された。宝玉が点滅しだし……………

「リアス・グレモリーか。助かったぞ。あのままだと相棒は朝まで気絶したままだった。こいつの代わりに礼を言っておこう。」

ドライグが話しかけてきた。

リアスはその言葉を聞き

「別にいいわ。私はこの子の主よ。この子が傷ついたならそれを心

配し癒やすために全力を尽くすのは当然の義務。礼を言われる事じゃないわ。」

当たり前の如く言い放った。

ドライグは忍び笑いをしながら呟いた。

「ククツ、成る程。相棒が本気になるのが理解できた。こいつは本当にお前の事が大事みたいだな。」

「……………どういう事かしら？」

リアスはそれを聞き逃さなかった。

ドライグは少し沈黙した後……………喋り出した。

「相棒には黙っておいてくれよ。後で何をされるかわからんからな……………こいつはな……………さっきまで俺と戦っていたんだ。勿論精神内だ。今回はいつものようなふざけたやり取りではなく……………殺し合いに近いやり取りをした。今、相棒の身体にある傷は精神内で俺が喰らわしたダメージだ。精神は肉体に強く影響を及ぼす……………何故かは知らんが特に相棒の場合はな。で、戦闘した結果……………俺が勝ち、こいつが負けて気絶したから倒れた……………ということだ。」

リアスはそれを聞き絶句した。

二天龍と称され神や魔王すら凌ぐ力を持つ赤龍帝と戦う……………何て無謀な行為を……………と。

だが更に驚く言葉をドライグが言ってきた。

「リアス・グレモリー。あまりこいつを過小評価するな。先の戦闘……………俺もかなり本気になった。……………正直危なかったぞ。一歩間違えれば俺が負けていた。言っておくが精神内での俺はセイクリッド・

ギアに封じられる前の俺だ。要するに縛りのない俺がそれなりに追い詰められたという事を指す。……………はあ、こいつと付き合いが長いから理解していたが本当に滅茶苦茶だ、相棒は。二天龍と言われた俺とあそこまで渡り合える奴なぞ久しく居なかつたぞ。俺も熱くなりすぎた……………が、楽しかつたな。あそこまで純粋に戦闘を楽しめたのはいつ以来だ……………。」

最後の方は何かを思い出すような呟きが変わっていたドライグ。しかしリアスは納得がいかないのか……………。「何故…そこまでして…何で自分を大事にしないの?」と微かな声で囁いた。静かな場所故にそれは十分に聞こえる範囲。ドライグにも勿論聞こえた。

「はあ……………ドラゴンたる俺が何でこんな事を……………やきが回ったか……………いや相棒の影響か……………全く……………おまえの為だ、リアス・グレモリー。」

「……………え?」

「こいつはな……………敵と見定めた奴には容赦はないが、味方……………取り分け自分の好きな相手や気に入った相手には甘いんだ。……………俺と闘う際に聞いてみた。」

「何故そこまでする?今でも十分に勝てるだろ。何故だ?」

とな。その問いにこいつは単純な答えを……………大真面目に返してきたよ。聞いた時は思わず笑つたな。そんな理由で俺と真剣勝負するのか!?と。」

「その理由は?」

リアスは気になり聞いてみた。
が、ドライブは

「……………こいつに聞け。俺が言う事じゃない。まあ相棒が吐くかど
うかは知らんし、そこまで世話を焼く気もない。……………俺ももう寝
る。久々に疲れたのでな。こいつをよろしく……………」。

答えずに一方的に話しを切り上げていった。

残されたのは有耶無耶にされ消化不良気味なリアスと気絶している
イッセーのみ。

リアスは少しの間イッセーの頭を撫でた後……………

「祐斗を呼んで運んでもらいましょ。イッセーが目を覚ましたらお
説教して問いただしたらいいだけだし。」

と呟き行動を開始した。

リアス s i d e e n d

「イッセー！？聞いているの！何故そんな酷い怪我をして倒れてたの
？答えなさい！」

「うえ…………えと……………転びました……………じゃ駄目ですか？」

「駄目よ。というか転んだだけで火傷までするなんて有り得ないでしょ。ちゃんと答えなさい。」

「……………うう。」

うへえ〜い。

今、俺はリアス部長に怒られてま〜す。

他のメンバーは朱乃さんの指示の元で自主訓練。

俺は目が覚めたら目の前に紅髪の麗しきお姉さまがいました。

何やらほっとした表情をした後に眉を吊り上げて怒りの表情になりました。

で即お説教タイムになりそれが終わった後はどんな事をしてあんな怪我を負ったか詰問されてます。

言えねえ。

ドライブとガチバトルしたなんて……………言えねえよ。

言ったら……………捨てられそうだ！

それだけは勘弁だ！

だからぜってーに言わない。

口が裂けても言えない！

あ、部長が溜め息……………諦めてくれたかな？

「……………聞いたわよ。ドライブから。」

「……………何ですと？」

今この人は何て……………

「どんな事をしてあんな傷を負ったのか……全部聞いたと言ってるの。」

……

『おいゴリア。ドライグ。聞いてんだろ？どついつ事だア？』

『……………グーグー（汗）』

寝たふりしてやがる……………いい度胸だ#

調教が足りな「ドライグを責めちゃダメよ。」……………何故に？

「ドライグは私とあなたの為に教えてくれたのよ。そんな彼を責める事はしてはいけないわ。だからダメ。わかった？返事は？」

くっ……………部長に言われると……………仕方ないか。

「わかりました。『命拾いしたな。』」

『……………ほっ。』

安堵しやがった。

やっぱり狸寝入りだったか、この赤トカゲめ。

はっ、そんな事より部長に確認を取らねば！

「部長……………あの……………どこまで……………聞きました？」

もしアレを聞かれてたら滅茶苦茶恥ずかしいんですけど！？

「ドライグとの命のやり取りに近い戦闘と……………私の為に強くなるう

としたぐらいよ。それ以上はイツセーから聞けと言われたわ。」

……ギリギリセーフ……なのか？

『あの時の問答は喋っていない。安心しろ。』

……良かった。

マジ良かったア。

アレ聞かれてたら赤面物だった。

恥ずかしすぎて部長と顔を合わせられんよ。

サンキュー………ってこいつにお礼を言うのはおかしい。

絶対におかしい。

ま、いいや。

「部長……あの……すいませんでした。でもですね！別に無茶したわけじゃないんですよ。ドライグと「教えなさい。」………へ？」

何を？

「ちゃんと本当の事を教えなさい。何故………そこまでして頑張るの？何故私の為にそこまで必死になるの？今回の件………単純に突き詰めれば私の我が儘が原因よ。グレモリー家として生まれ次期党首の私は婿養子を取るのは必然。政略結婚も当然のこと。それを私が嫌だからと我が儘を言ってここまでこじれたの。本当は下僕であるあなた達を巻き込む必要なんてなかった。本当はあなた達が………あなたがそこまで頑張る必要はないの。………どう？これを聞いてもあなたは頑張れる？………教えて。」

………何でこの人は………

「頑張れますよ。何を当たり前の事聞いてんですか？」

こんな当たり前の事を聞いてくるの？

おや、キョトンとした表情……………可愛いです！

部長って綺麗なだけじゃなく可愛い部分もあるよな。

「え？え？あなたちゃんと聞いてた？」

失礼な！？

部長の声を聞き逃すなんて有り得んですよ。

「聞いてましたよ。まあ部長が納得しないようですから言います。

……………部長はライザーが嫌いでしょ？」

「え……………まあ……………好きではないわね。あの人は“リアス・グレモリ”として私を見る。私は結婚するなら“リアス”として見てくれる人と結婚したいから……………」

だろうな。

本来のイッセーならここでリアス部長が大好きですよとか言っただろうけど……………俺はひねくれているからな。

「そこですね。部長が好きじゃない相手と結婚する……………そしたらね……………見れないじゃないですか。」

そんな……………

「何を？」

簡単に……………

「笑顔。」

相手の事を大好きとか……

「え？」

言えないんだよ。

「部長の……リアス先輩の幸せな笑顔が晴れの舞台でも見れないじゃないですか。ちよつと前に言いましたよね。俺は笑った部長が大好きですつて。俺はですね……大事な人達には笑顔でいてほしいんです。幸せになって笑っていて欲しいんです。」

惚れてるからなんて恥ずかしくて言えるか！

悪いか！？へタレで！

「その大事な人達が何かの原因で笑えないって言うなら俺は全力でその原因を排除します。それが例え神だろうが魔王だろうが……。今回の場合は焼き鳥野郎ですけど。だから頑張ります。頑張れます。部長の……リアス先輩の本当に笑った顔が見たいから。」

……つてよくよく考えればこの台詞も恥ずかしいわ！
うあ~~~~！

部長の顔まともに見れねー！？

「すみません！？俺ちよつとトイレに行きます！」

三十六計逃げるが勝ちだ！

このまま夕飯時まで雲隠れしよつと。

リアス s i d e

「……………」

リアスは呆然としていた。
先程のイツセーの言葉が脳内でリピートされる。
酷く心に残った。

何故？

自問する。

答えは出ない。

もう一度……………」

「あ……………」

気づいた。

“リアス先輩の本当に笑った顔が見たいから”

「……………あの子は…私を見てくれてる……………?」

その瞬間リアスの心臓の鼓動が少しだけ早まった。
同時に知らず知らずの内に赤面していた。
リアスは頭をブンブンと振り……………」

「今はゲームの事を考えましょ！とにかく勝たなきゃいけないから。」

「と言いきえるのを止めた。」

リアスは気づかない振りをした。

自身に芽生えた何かを。

それに気づくのは……意外に早く訪れる事となる。

s i d e e n d

おまけ

「何故そこまでする？」

「惚れてるから。」

「はっ？」

「だあかあらあ！惚れてるから。そんだけだ。……悪いか？」

「……………相棒……………おまえ……………本当に馬鹿だったんだな。」

「馬鹿で大いに結構。男はな……………惚れた相手の為ならどれだけでも馬鹿になれんだよ。」

「……………それだけの理由で俺と本気で勝負する奴は…初めてだな。」

「強い奴と本気で命のやり取りしたら自然と強くなれんだろ。だからドライグ……………本気で闘るぜ。」

「……………クク……………ククク……………ハアッーハッハッハッ！いいだろう相棒……………いや兵藤一誠！二天龍の……………赤龍帝の……………力の塊と言われた俺の力を……………得と味わい強くなれ！！イクぞ！死ぬなよ、兵藤一誠！！！」

「応！！！」

おまけ終わり

次回へつづく

恥ずかしくて言えるか！（後書き）

原作豆知識

《バランスブレイク禁手化》について

・セイクリッド・ギアの限界を極めた先にある形態。
原作者様曰わくブリーチの卍解やドラゴンボールの超サイヤ人状態らしいです。

これはセイクリッド・ギア持ちでも数える程しかできないみたいなんですけど……………原作ではこれが沢山出てます。
勿論、これも殆ど原作沿いだから出ます。

ついでに言えば換装能力も似たような状態でパワーアップします。
先に言っておきますね。

アルト・アイゼン アルト・アイゼンリーゼ
ヴァイスリッター ライン・ヴァイスリッター
アンジユルグ ヴァイサーガ

です。

ソウルゲインはコード《麒麟》が使用可能になるだけです。

ただこの作品のブーステッド・ギアには更に奥の手を用意してます。
お楽しみに。

……………まあ書いちゃってますがね。

《ジャガーノート・ドライブ覇龍》について

・二天龍を封じ込めているセイクリッド・ギアのみ有される技。
所有者に絶大な力…天龍の力を与える代わりに命を削り取る諸刃の

技。

ただ莫大な魔力で多少は制御する事ができる模様。

このイツセーも変態仮面に貰った魔力を使えば少しは制御できるが、バカだから気づいてません。

これについては追々出てきますのでその時に。

もし詳しく知りたければググるか原作をどうぞ。

ググって出んのかな？

今回はこんな感じですかね。

とりあえずサヨナラ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115y/>

ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

2012年1月11日02時50分発行